郷原石堂口遺跡
郷原古墳群

一般県道河原インター線道路改良工事に伴う
郷原石堂口遺跡、郷原3・10・13・14・15号墳の発掘調査

2006.7

財団法人　鳥取市文化財団

郷原石堂口遺跡
郷原古墳群

一般県道河原インター線道路改良工事に伴う
郷原石堂口遺跡、郷原3・10・13・14・15号墳の発掘調査

2006.7

財団法人　鳥取市文化財団

郷原石堂口遺跡　郷原13・14号墳（北西から）

郷原14号墳　第１主体部（北東から）

巻頭図版 2

郷原14号墳　第１主体部出土高杯

郷原14号墳　第１主体部出土鉄剣

序　　文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人　鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した河原町郷原石堂口遺跡、郷原古墳群の調査は、一般県道河原インター線道路改良工事に伴う発掘調査として、平成17、18年度に調査を行いました。これらの遺跡は千代川と八東川とが合流する平野の丘陵部に展開します。平成15年度に旧河原町による試掘調査が行われ、新規に発見された古墳も含まれます。今回の調査によって、古墳時代中期から後期にかけての古墳５基、土坑が見つかり、須恵器、土師器などのほかに、鞘に入った鉄剣、刀子、高杯転用枕など貴重な資料が出土しました。

これらの調査成果は、当地域のみならず古代因幡地方の歴史を探る上で大きく役立っていくものと確信いたします。ささやかな冊子ではありますが、研究者のみならず広範な市民各位による郷土の歴史究明など、関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成18年７月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　山　﨑　祥　次

例　　言

1．本書は、一般県道河原インター線道路改良工事の事前調査として実施した郷原石堂口（ごうばらいしどうぐち）遺跡、郷原古墳群の発掘調査報告書である。
2．本発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センターが平成17、18年度に実施した。
3．発掘調査を実施した遺跡の所在地は、郷原石堂口遺跡は鳥取市河原町大字郷原字石堂口、郷原古墳群は鳥取市河原町大字三谷字国ヶ谷である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5．現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測・浄書は、神谷伊鈴、下多みゆき、濵橋博子を中心として行った。出土遺物観察表は神谷伊鈴が作成した。本書の執筆、編集は谷口恭子が担当した。
6．現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびにご協力をいただいた。厚く感謝いたします。

凡　　例

1．本書における方位は、第１・２図を除き国土座標第Ｖ系（世界測地系）による座標北を示す。また、高さは海抜標高である。
2．本書で遺構の略号として、土坑；SK を使用した。
3．今回の調査によって出土した遺物は、遺跡名、遺構名、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。
（例；2005ゴウ原石堂口14号墳　第１主体№02　2006.04.07）

本 文 目 次

序文

例言

凡例

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査にいたる経緯……1

第２節　発掘調査の経過……1

第３節　調査の組織・体制……2

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．郷原石堂口遺跡、郷原古墳群の位置……3

２．遺跡の歴史的環境……3

第３章　調査の結果

第１節　郷原石堂口遺跡の調査

１．郷原13号墳……17

２．郷原14号墳……18

３．その他の遺構……22

第２節　郷原古墳群の調査

１．郷原３号墳……25

２．郷原10号墳……25

３．郷原15号墳……27

４．その他の遺構と遺物……27

（出土遺物観察表）

第３節　まとめ……29

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　郷原石堂口遺跡・郷原古墳群周辺遺跡分布図……５
第２図　郷原石堂口遺跡・郷原古墳群調査地位置図……６
第３図　郷原石堂口遺跡地形図……７・８
第４図　郷原石堂口遺跡調査区全体図……９・10
第５図　郷原石堂口遺跡調査区断面図（１）……９・10
第６図　郷原13・14号墳・郷原石堂口遺跡調査区断面図（２）……11
第７図　郷原古墳群地形図……13・14
第８図　郷原古墳群調査区全体図……15・16
第９図　郷原古墳群調査区断面図……15・16
第10図　郷原13号墳南溝遺物出土状況実測図……17
第11図　郷原13号墳南溝出土遺物実測図……17
第12図　郷原13号墳北東裾出土遺物実測図……17
第13図　郷原14号墳第１主体部出土遺物実測図……18
第14図　郷原14号墳第１主体部実測図……19・20
第15図　郷原14号墳第１主体部遺物出土状況実測図……19・20
第16図　郷原14号墳第２主体部実測図……22
第17図　郷原14号墳第２主体部出土遺物実測図……21
第18図　郷原石堂口遺跡SK-01実測図……23
第19図　郷原石堂口遺跡SK-02実測図……24
第20図　郷原３号墳周溝出土遺物実測図……25
第21図　郷原10号墳主体部実測図……26
第22図　郷原10号墳南東裾出土遺物実測図……26
第23図　郷原古墳群D4杭東斜面出土遺物実測図……26
第24図　郷原古墳群SK-01実測図……27
第25図　郷原古墳群SK-02実測図……27

図版目次

巻頭図版１　郷原石堂口遺跡・郷原13・14号墳（北西から）
郷原14号墳第１主体部（北東から）
巻頭図版２　郷原14号墳第１主体部出土高杯
郷原14号墳第１主体部出土鉄剣
図版１　郷原石堂口遺跡調査地遠景（北東から）
郷原石堂口遺跡調査前（北から）
郷原石堂口遺跡調査区土層ベルト設定状況（北西から）
郷原石堂口遺跡調査区全景（北西から）
図版２　郷原石堂口遺跡・郷原13号墳全景（北西から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳墳頂部（北西から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳全景（北東から）
図版３　郷原石堂口遺跡・郷原13号墳墳丘東斜面土層断面（SK-02部分を含む）（北から）
郷原石堂口遺跡・郷原13号墳墳丘東斜面須恵器出土状況（北から）
郷原石堂口遺跡・郷原13号墳南溝土層断面（北東から）
郷原石堂口遺跡・郷原13号墳南溝高杯出土状況（東から）
図版４　郷原石堂口遺跡・郷原14号墳土層ベルト設定状況（北東から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳南溝土層断面（北東から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳第１主体部東西土層断面（北西から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳第１主体部南北土層断面（北東から）
図版５　郷原石堂口遺跡・郷原14号墳第１主体部検出状況（北東から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳第１主体部遺物出土状況（北西から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳第１主体部高杯転用枕（北東から）
図版６　郷原石堂口遺跡・郷原14号墳第２主体部南北土層断面（東から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳第２主体部検出状況（東から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳第２主体部刀子出土状況（東から）
郷原石堂口遺跡・郷原14号墳墳丘断割状況（北東から）
図版７　郷原石堂口遺跡SK-01土層断面（北から）
郷原石堂口遺跡SK-01検出状況（西から）
郷原石堂口遺跡SK-01横口部（西から）
郷原石堂口遺跡SK-02検出状況（北から）
図版８　郷原古墳群調査前（北西から）
郷原古墳群調査前（南から）
郷原古墳群調査区土層ベルト設定状況（北西から）
郷原古墳群調査区全景（北西から）
図版９　郷原古墳群・郷原３・10号墳調査前（南から）
郷原古墳群・郷原３号墳土層ベルト断面（南東から）
郷原古墳群・郷原３号墳墳丘断割状況（南東から）
郷原古墳群・郷原３号墳周溝内須恵器出土状況（東から）
図版10　郷原古墳群・郷原10号墳土層ベルト断面（北東から）
郷原古墳群・郷原10号墳検出状況（北西から）
郷原古墳群・郷原10号墳主体部土層断面（東から）
郷原古墳群・郷原10号墳主体部検出状況（東から）
図版11　郷原古墳群・郷原10号墳墳丘断割断面（北東から）
郷原古墳群・郷原15号墳土層ベルト断面（南西から）
郷原古墳群・郷原15号墳墳丘遺存状況（北西から）
郷原古墳群・郷原15号墳墳頂部精査後（西から）
図版12　郷原古墳群SK-01土層断面（南から）
郷原古墳群SK-01検出状況（西から）
郷原古墳群SK-02土層断面（西から）
郷原古墳群SK-02検出状況（西から）
図版13　郷原石堂口遺跡・郷原13号墳南溝出土高杯
郷原13号墳北東斜面出土須恵器
郷原14号墳第１主体部出土遺物
郷原14号墳第２主体部出土遺物
郷原古墳群・郷原３号墳周溝出土遺物
図版14　郷原３号墳南東出土須恵器
郷原10号墳南東出土土師器
郷原古墳群C2杭東斜面出土須恵器
郷原古墳群D4杭東斜面出土土師器

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査にいたる経緯

郷原石堂口遺跡、郷原古墳群は、鳥取市河原町郷原、三谷にそれぞれ所在し、千代川と八東川が合流する今在家平野の南丘陵上に展開する。古来より郷原、三谷周辺には古墳や遺跡が数多く分布することが知られ、昭和30年に町指定文化財である郷原１号墳、昭和58年に中世の集落遺跡である前田遺跡、昭和60年に弥生～奈良・平安時代の住居跡が見つかった郷原遺跡など古くから発掘調査が行われてきた地域である。

今回、郷原石堂口遺跡、郷原古墳群の発掘調査の契機となった一般県道河原インター線道路改良工事事業は、中国横断自動車道姫路鳥取線河原インターチェンジへのアクセス道として国道29号線と53号線を結び高速道路網を補完する幹線道路として鳥取県が整備計画した事業である。工事区域は古墳群の分布する丘陵を東西に横断することから、また、その他の遺跡所在の確認を行うために河原町教育委員会が平成15年に工事区域の試掘調査を行っている。調査の結果、新たに古墳２基と遺跡３箇所が確認され、関係機関と協議の結果、記録保存で対応することとなった。なお、平成16年６～10月に河原町教育委員会が郷原11号墳の調査を実施し、報告書が刊行されている。平成16年11月、河原町を含め周辺９市町村が合併して新鳥取市となったことから、鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターがこれらの遺跡について調査を行うこととなった。

第２節　発掘調査の経過

郷原石堂口遺跡、郷原古墳群の発掘調査は、鳥取県の委託を受け、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが平成17、18年度に現地調査を、18年度に報告書作成作業を行った。

平成17年度は、11月から資材の整備や資材の搬入などの調査準備に取りかかり立ち木の伐開整理の後、本格的な調査を12月初旬から開始した。業者委託により基準点測量を行い、細かな地形補足・修正については手取りで対応した。

表土除去作業は丘陵高位の南側からとりかかり、丘陵先端の北側へと順次進めた。河原町が行った試掘トレンチを精査、合わせて土層観察用ベルトに沿ってトレンチを掘削し、盛土等の確認を行った。結果、試掘T7-2トレンチで確認された溝は古墳に伴う溝と判明、丘陵先端の平坦部も溝で尾根を分断し盛土が低位側を中心に確認され、調査区に古墳２基(13号墳、14号墳)の存在が明らかとなった。13号墳の墳頂部は地山面が露出しており主体部は既に流失、南溝から高杯、北東斜面から須恵器片が出土している。14号墳は２基の埋葬施設を検出、そのうち中心主体となる第１主体部で高杯３点を組み合わせた転用枕と鉄剣、第２主体部では刀子が出土した。これら２基の方墳は出土遺物より古墳時代中期中葉に相次いで築造されたと考えられる。この他の遺構として調査区内で土坑２基を検出し、このうちSK-01は深さ3.5mと深く底部に横口部を有するなど時期・性格ともに不明である。

郷原古墳群は、郷原石堂口遺跡と並行して調査を進め、３号墳、10号墳の他に新たに15号墳と土坑２基を検出した。３古墳はいずれも円墳で、10号墳で主体部１基を検出した。出土遺物は周溝や古墳周辺で少量の須恵器・土師器片が出土しており、中期から後期にかけての築造と考えられる。土坑については出土遺物も見られず時期は不明である。

調査を通じて埋葬施設および遺構、遺物については適宜写真撮影や実測して記録をとり、取り上げを適宜行った。最終的に古墳は墳丘を断ち割って断面調査を行った。また、地形図・遺存図については業者委託を行い実施した。こうして４月26日に撤収を行い同月29日、現地説明会を開催し現地調査を終了した。

出土した遺物、写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、出土遺物については水洗

い後注記、接合・復元作業を行った。鉄製品については業者委託による応急保存処理を行った。順次報告書作成作業にとりかかり、平成18年７月31日に調査を終了した。

第３節　調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成17年度

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団

理事長 兼常務理事	小谷荘太郎
副理事長	三田三香子
	住田　髙市

調査指導　鳥取市教育委員会　事務局文化財課

事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

所長	前田　　均
主幹	藤本　隆之
調査事務	秋田　澄世

調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

調査員	谷口　恭子
調査補助員	神谷　伊鈴
	下多みゆき
	濵橋　博子

平成18年度

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団

理事長 兼常務理事	山﨑　祥次
副理事長	三田三香子
	住田　髙市

調査指導　鳥取市教育委員会　事務局文化財課

事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

所長	前田　　均
副所長	山田　真宏
調査事務	秋田　澄世

調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

調査員	谷口　恭子
	神谷　伊鈴
調査補助員	下多みゆき
	濵橋　博子

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．郷原石堂口遺跡、郷原古墳群の位置

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25㎢、人口20.1万人を擁する県庁所在地である。平成16年11月１日に周辺八市町村を含めた広域合併を行い、北は日本海を臨み南は岡山県と県境をはさむ。地域の中央を中国山地を源とする千代川が北上する。

郷原石堂口遺跡、郷原古墳群は、鳥取市河原町（合併前の旧八頭郡河原町）に所在する。郷原石堂口遺跡は河原町郷原、郷原古墳群は河原町郷原、三谷にまたがる。河原町は鳥取県東部のほぼ中央部に位置し、東西17.6㎞、南北9.3㎞と東西に長く総面積83.62㎢である。町の東端を千代川が南北に貫流し、交通の大動脈である国道53号線もそれに沿って岡山県へと続く。千代川の中流域および支流の八東川、曳田川、宇戸川下流域を小平野とし、西方一帯には標高200～1,000mの山地に囲まれた山間部が広がる。河原町の地質は多様で、町の西半は中生代火山岩類が広がり、東半は鳥取総群と総称する新第三紀中新世～鮮新世の地層や岩石に広く覆われており、郷原・三谷地域は鳥取層群円通寺礫岩砂岩層の礫・砂・泥互層から成り、ブナ・カエデなどの植物化石が一部で産出する。谷底平野を中心とする平坦地を水稲栽培、居住域に充て、低丘陵部を梨を中心とした果樹栽培、畑地、放牧場に利用している。

郷原石堂口遺跡、郷原古墳群は、河原町の中央東端部に位置し、千代川と八東川、八東川と私都川が合流する国中平野入口の平野部後背の標高100m程度の丘陵部に展開する。東側の丘陵線を越えると旧郡家町と旧船岡町である。八東川の河口付近へ注ぐ三谷川が小平野の中央部を流れ、郷原古墳群は三谷川を挟んだ郷原および三谷集落の周辺丘陵部に展開する古墳群である。西岸の丘陵標高93mに郷原石堂口遺跡、東岸の丘陵76mに今回の調査地の郷原古墳群が所在する。三谷川流域および丘陵一帯は古墳や遺跡が数多く分布することで知られる。遺跡周辺は圃場整備が行われ、昭和58年に郷原遺跡、昭和60年に前田遺跡の発掘調査が行われている。

今後、中国横断自動車道姫路鳥取線および河原インター線の完成によって遺跡周辺の状況は変化していくとみられ、河原インターチェンジ付近にこの春道の駅「清流茶屋かわはら」がオープンした。その東側一帯の丘陵、谷部を横断するように河原インター線が工事を行っている。これら交通網の整備・開発によって今後景観は徐々に変貌していくものと考えられる。

２．遺跡の歴史的環境

河原町内には、現在のところ、230箇所余りの遺跡が確認されている。

【縄文時代】　河原町で縄文時代の遺跡としては、前田遺跡、下中溝遺跡でわずかに縄文土器が出土しており、隣町の用瀬町でも余井遺跡、鷹狩遺跡で縄文土器や石器が出土している程度である。八東川流域の旧郡家町万代寺遺跡では後期～晩期と考えられる落し穴53基が、西御門遺跡では後期の多くの土器、石器がいずれも発掘調査で見つかっている。また、同じ千代川水系の中国山地山間部に位置する縄文時代の遺跡として智頭町智頭枕田遺跡が挙げられる。平成14年、早期および中期末から後期初頭の竪穴住居多数が発見され、内６棟に石囲埋甕炉が遺存するなど10万点を越す土器・石器などを含め、西日本最大級の縄文集落として注目されている。

【弥生時代】　河原町で弥生時代の遺跡は、今在家の上土居遺跡から中期土器数片、下中溝遺跡から後期後葉の土器、前田遺跡で同じく後期後葉期の掘立柱建物と土壙、郷原遺跡で竪穴住居３棟、山手森谷上分遺跡でも竪穴住居が検出されている。現状では千代川と八東川が合流する平野南東の丘陵裾の微高地、河岸段丘上に弥生時代の遺跡の分布の中心があり、同じく曳田川流域や佐貫周辺の段丘上でも同様な状況で集落遺跡の存在が推察されている。

【古墳時代】　古墳時代に入って、平野を望む丘陵上に古墳が築造されるようになる。千代川西岸の築

瀬山(標高283m)の尾根先端に立地する嶽古墳(八上１号墳)は全長50mを測る前方後円墳で、中期後半～後期前半頃の築造と言われている。嶽古墳から曳田川上流の１㎞北西に６世紀後半～末葉の天神原須恵器窯跡群、さらに１㎞弱上流に全長55mを測る八頭郡最大の前方後円墳である中井１号墳が展開する。千代川東岸では霊石山(標高334m)北裾に展開する稲常古墳群は82基からなり、河原町最大の古墳密集地域である。霊石山南側の主要古墳群として旧郡家町の福本古墳群があり、河原町寄りでは千代川と八東川とが合流する平野南東の山手および郷原集落後背の丘陵上に古墳が集中する。山手古墳群、加賀瀬古墳群、郷原古墳群である。特に18基が確認されている山手古墳群では１号墳で盤龍鏡、７号墳で変形神獣鏡が出土したとされる。この他加賀瀬古墳群では径26mの円墳である２号墳が含まれ、郷原古墳群中には全長30.5mを測る前方後円墳である郷原７号墳が注目される。発掘調査された郷原１号墳は径８mの５世紀後半の円墳で、長さ3.6mの長大な箱式石棺から鉄刀、刀子、高杯転用枕が出土している。同様に11号墳は径7.3mの６世紀後葉の円墳で木棺直葬の墓壙内から須恵器蓋杯を主とした供献土器４セットが出土している。この他、弥生時代から続く集落遺跡として、郷原遺跡で古墳時代初頭～終末の竪穴住居が検出されている。

【歴史時代】　律令体制下、この地域は因幡国八上郡石田郷に組み込まれており、中世前期には庄園化したとされる。『公卿補任』宝亀３年(772年)に八上郡の記述がみられ、大同３年(808年)八上郡と智頭郡の駅馬に関する記述もあり山陽側に連絡する交通網が開けていたことが窺える。万代寺遺跡が八上郡衙と考えられ、その北西に土師百井廃寺跡が配置する。法起寺式伽藍で軒丸瓦は重圏文単弁８葉蓮華文で土師百井式と言われている。この時期の集落として２㎞弱南西に位置する郷原遺跡で掘立柱建物10棟、土壙、柵列、単弁７葉蓮華文軒丸瓦などが出土しており、山手森谷上分遺跡でも掘立柱建物が多数検出されるなどその関連が注目される。またやや南に離れた下中溝遺跡では土馬と獣形土製品が出土している。

平安から鎌倉時代にかけて、古代の国郡里体制から荘園・公領支配へ体制が移行するなかで、因幡では律令の郷体制があまり変動しないまま中世郷へ発展したとみられ、在地領主が郡司・保司という形で国衙支配にあたった。河原町内には高野山岩田荘がある。『稲葉民談記』によると岩田荘19ケ村の中に高津原村の名があり、高津原集落の東に通称高尾山には中世の山城である高津原城が築かれている。中世室町時代の集落遺跡である前田遺跡は、昭和58年の発掘調査によって屋敷跡と井戸が検出され、備前、瀬戸、青磁、白磁などの陶磁器が出土している。この２基の井戸から病気平癒のまじない呪符２枚、舟形木製品、漆椀などが出土している。このように歴史時代の調査例も徐々に増える傾向にあり、今後文献を裏付けるような新しい資料を提供してくれるであろう。

引用・主要参考文献
河原町教育委員会『前田遺跡発掘調査報告書』1983年
河原町教育委員会『郷原発掘調査報告書遺跡』1986年
河原町『河原町誌』1986年
平凡社『日本歴史地名大系第32巻　鳥取県の地名』1992年
㈶鳥取県教育文化財団『高福大将軍遺跡』2002年
河原町教育委員会『河原町内遺跡発掘調査報告書』2004年

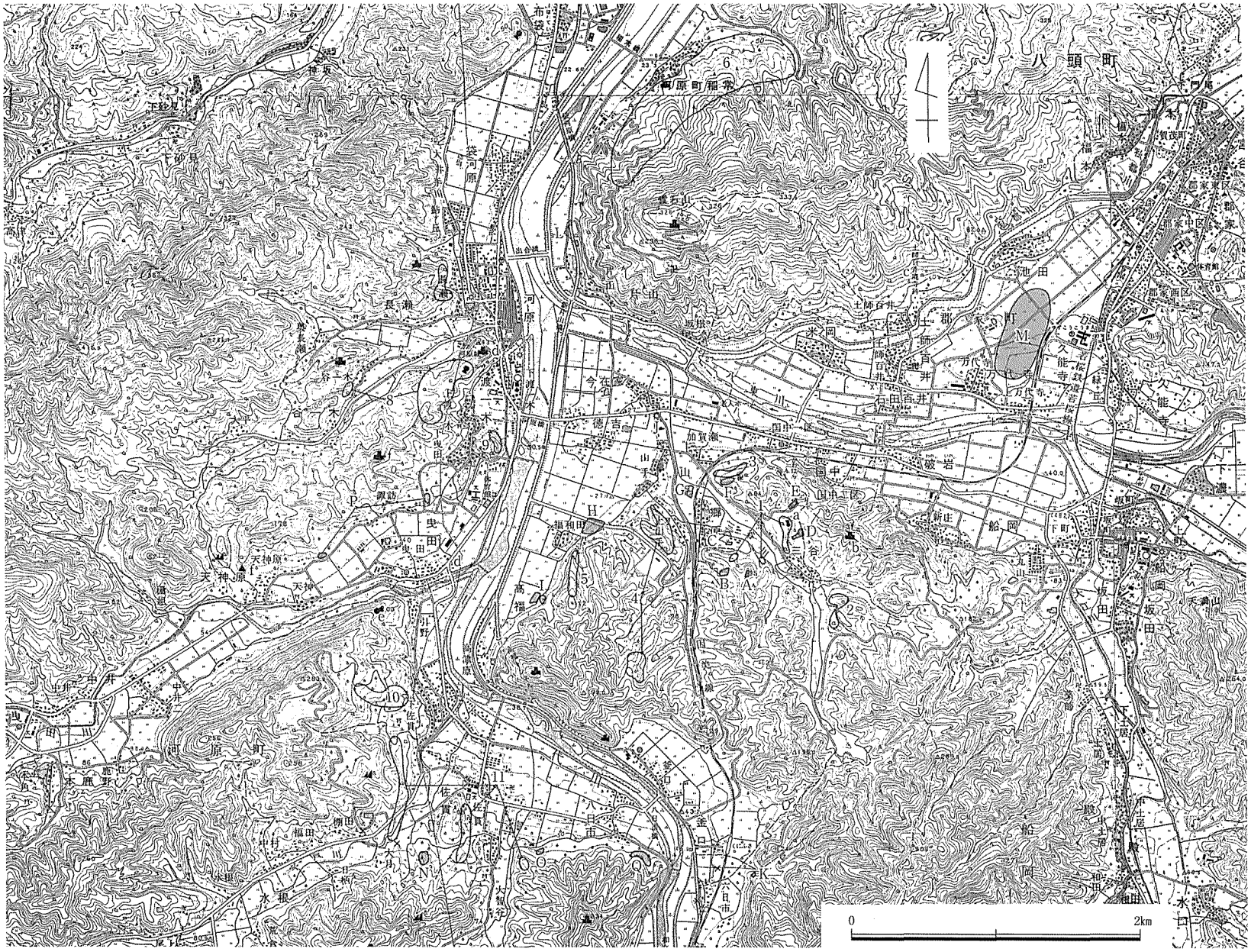
1．郷原古墳群
2．三谷古墳群
3．加賀瀬古墳群
4．山手古墳群
5．高福古墳群
6．稲常古墳群
7．長瀬古墳群
8．谷一木古墳群
9．渡一木古墳群
10．大平古墳群
11．佐貫古墳群

A．郷原石堂口遺跡
B．郷原地才エ下平遺跡
C．郷原遺跡
D．三谷園ヶ谷遺跡
E．山手森谷上分遺跡
F．加賀瀬遺跡
G．前田遺跡
H．高福所在遺跡
I．高福大将軍遺跡
J．上土井遺跡
K．釜口遺跡
L．片山遺跡
M．万代寺遺跡
N．佐貫遺跡
O．佐貫上台遺跡
P．曳田遺跡
Q．八日市経塚

a．郷原７号墳
b．三谷城跡
c．土師百井廃寺跡
d．丸山城跡
e．八上１号墳
f．天神原須恵器窯跡

—凡例—

集落遺跡・遺物散布地
墳墓群・古墳群
主要古墳
横穴
城跡
窯跡



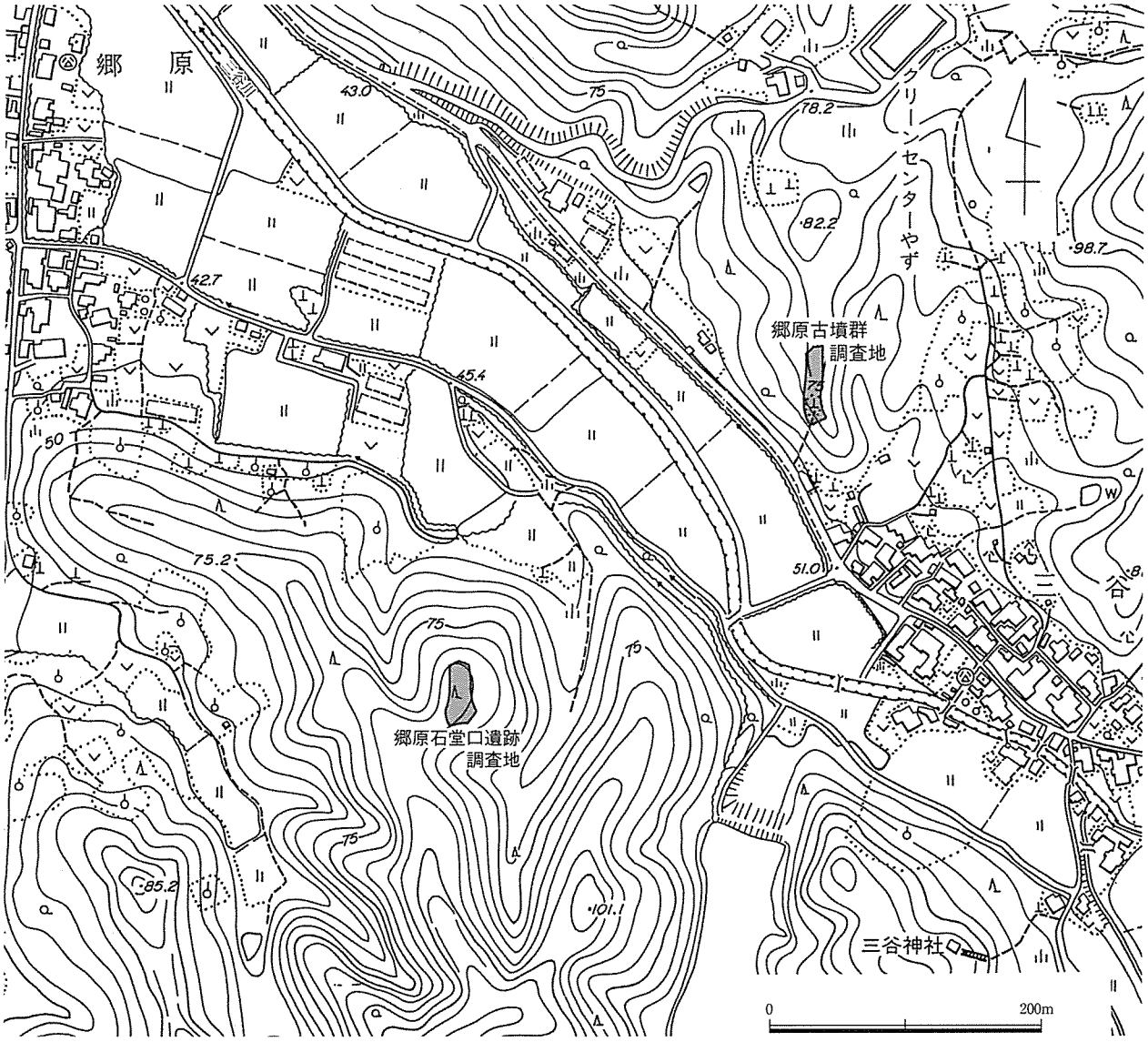
第１図　郷原石堂口遺跡・郷原古墳群周辺遺跡分布図(S＝１：40,000)

第３章　調査の結果

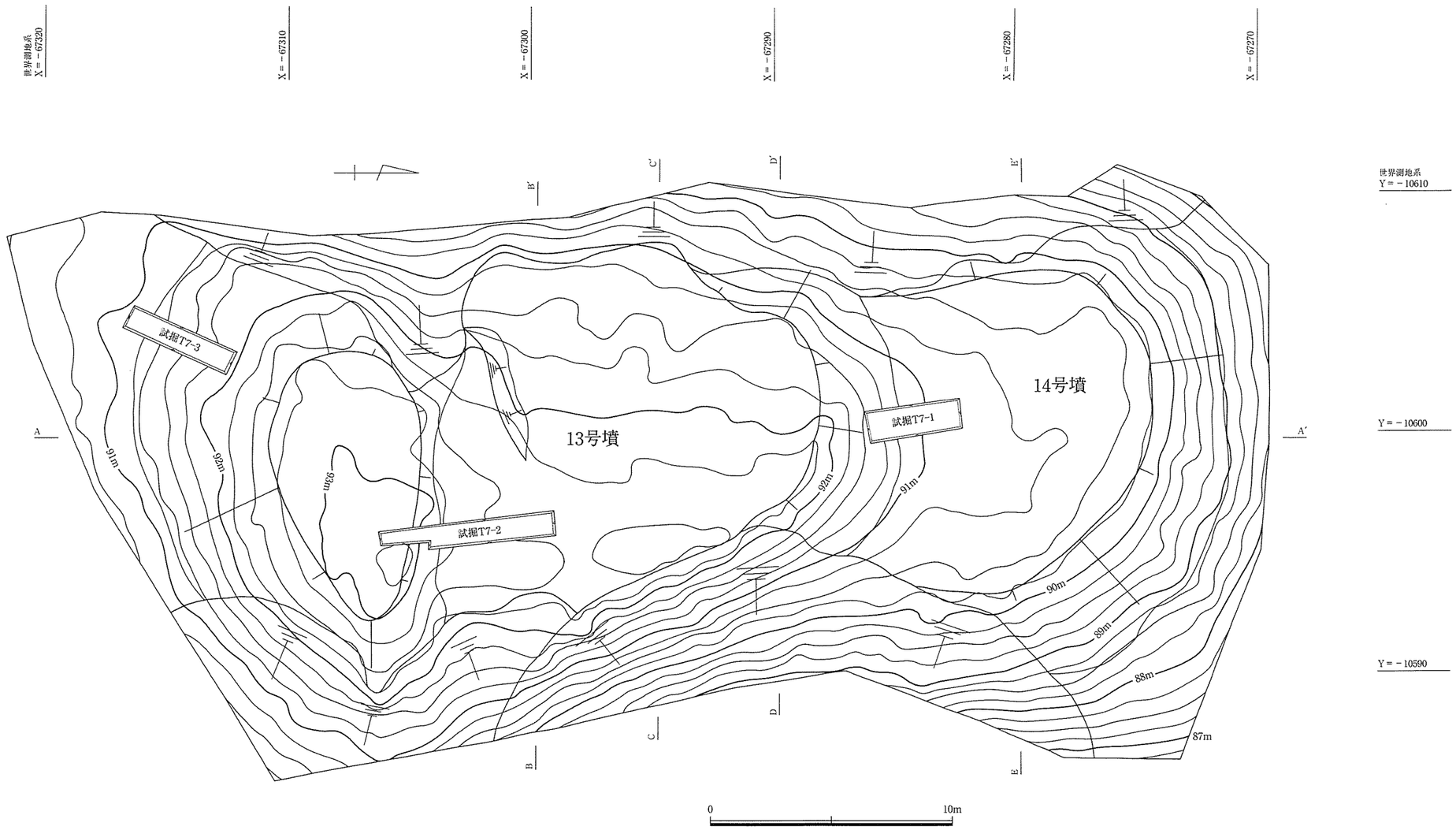
第１節　郷原石堂口遺跡の調査（第２図）

郷原石堂口遺跡は、鳥取市河原町郷原に所在する。中国山地から派生する丘陵のうち、河原町と用瀬町の境界にそびえる医王山（標高363m）から北東へ下りさらに北西へと下る丘陵の中程、標高93m一帯に展開する。周辺は標高100m程度の尾根が複雑に入り組んで張り出し、中央に三谷の谷を挟む。山間には農業用の溜池が小谷ごとにいくつも造られている。

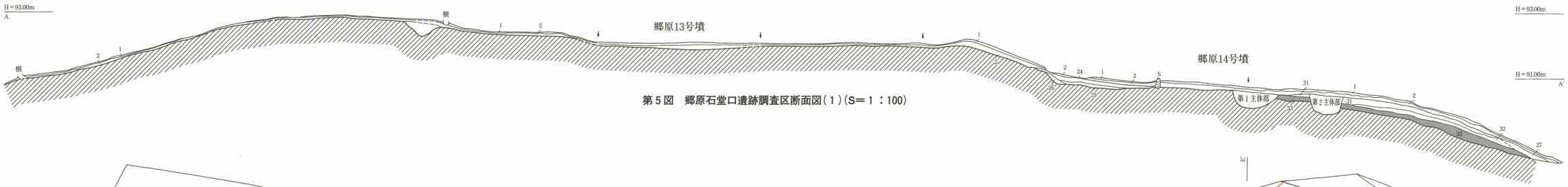
郷原石堂口遺跡は三谷の谷を挟んで展開する郷原古墳群の分布範囲と重なる。河原町教育委員会の試掘調査T7-2トレンチで赤彩高杯を伴った溝状遺構を検出したことから古墳の可能性を指摘しながらも「郷原石堂口遺跡」として登録されており、今回はその名称に従った。今回の調査地が所在する尾根とは別の支稜線上に古墳４基が確認されており、このうち140m北西の郷原１号墳、150m北東の郷原11号墳はいずれも発掘調査が行われている。今回調査の新規発見分を含め郷原古墳群では現在までに古墳計15基が確認されている。しかしながら十分に分布調査がなされているとは言えず、今後詳細な踏査がすすめばさらに増加する可能性がある。またこれらの地域では、平野部で昭和58年に中世の集落遺跡である前田遺跡、昭和60年に郷原１号墳から70mほど北西の丘陵裾部の微高地で郷原遺跡の調査が行われており、弥生時代後期終末～古墳時代初頭の竪穴住居６棟を含め奈良・平安時代の掘立柱建物などが検出されている。古くから遺跡の存在が地元に知られた地域である。



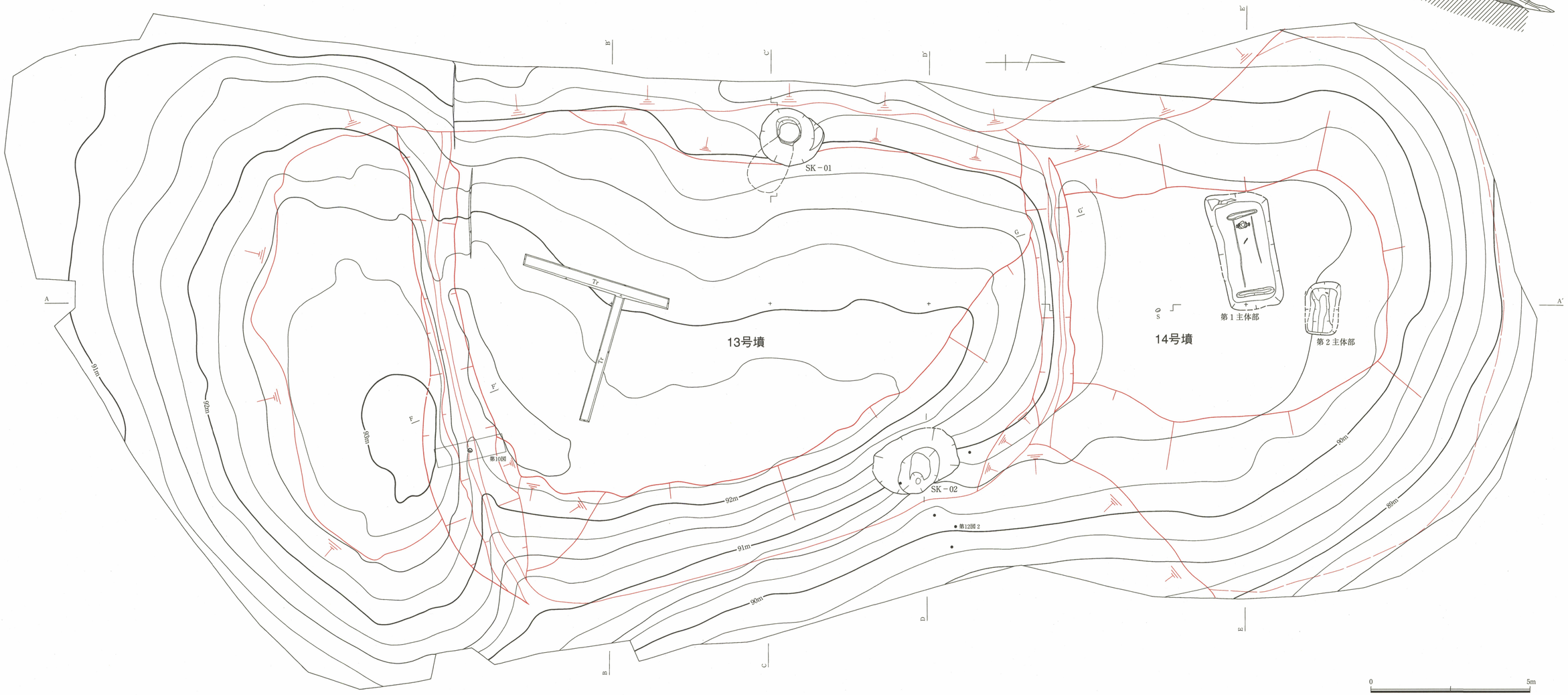
第２図　郷原石堂口遺跡・郷原古墳群調査地位置図（Ｓ＝１：5,000）



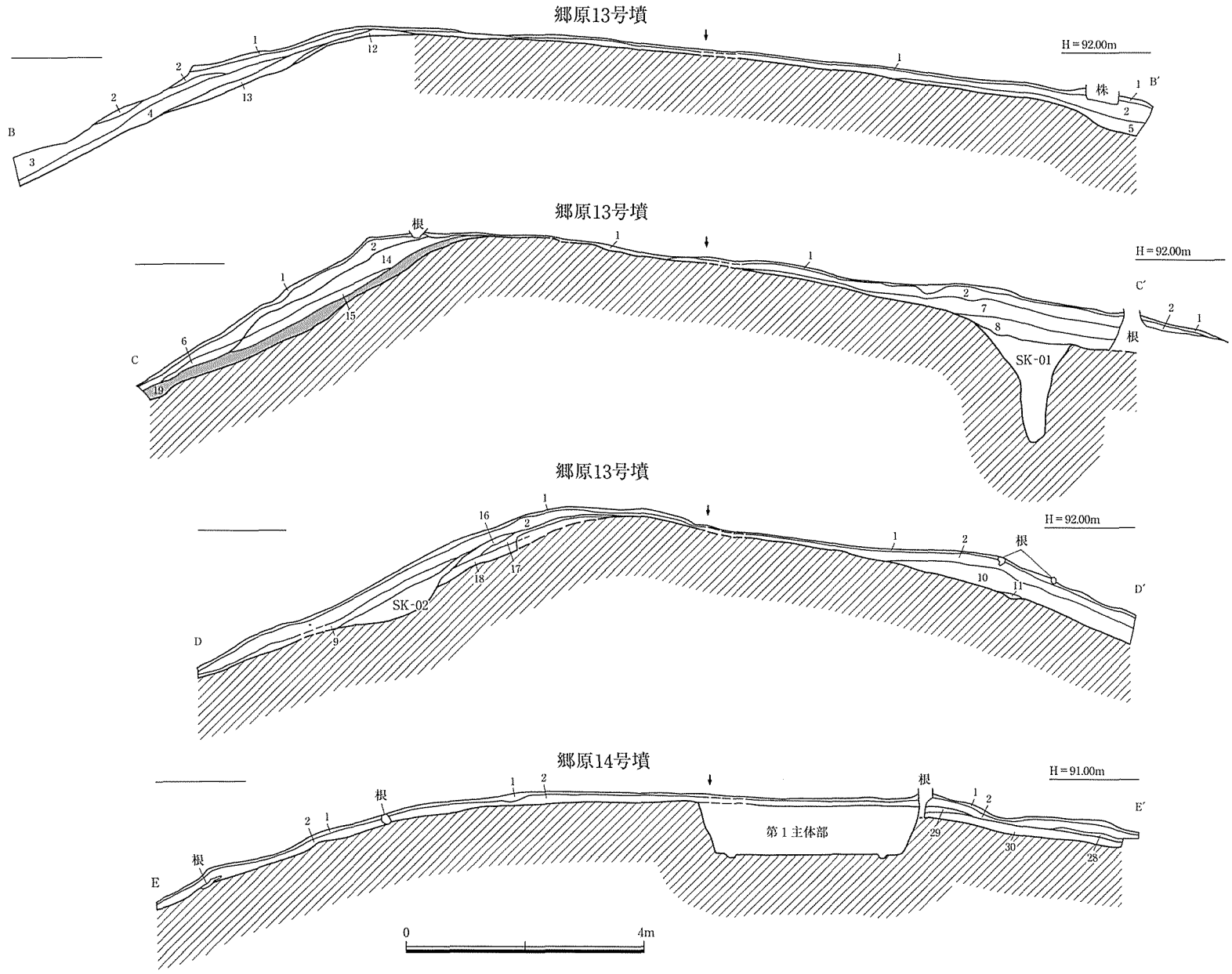
第３図　郷原石堂口遺跡地形図（Ｓ＝１：200）

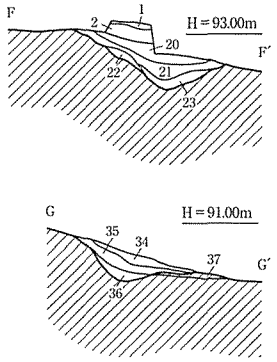


第５図　郷原石堂口遺跡調査区断面図（１）（S＝１：100）



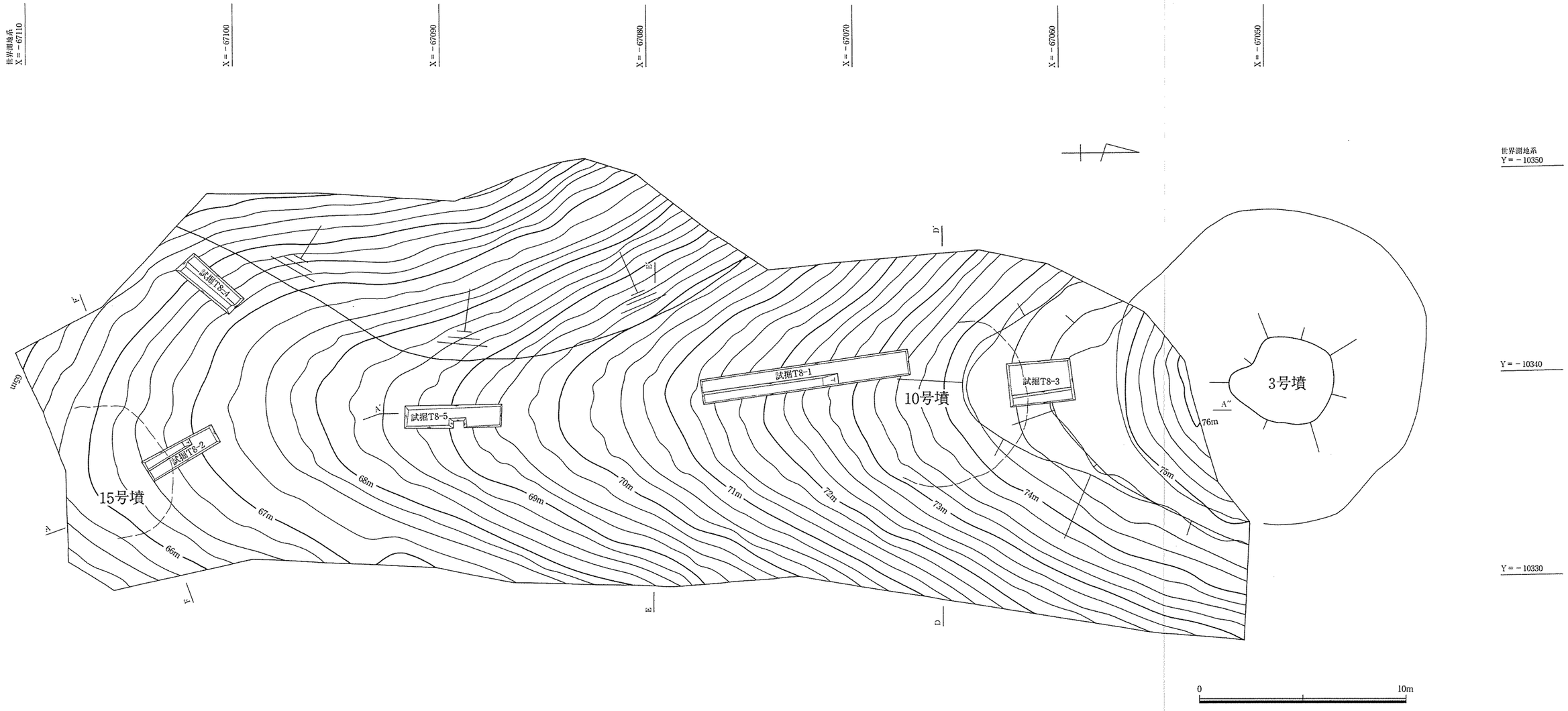
第４図　郷原石堂口遺跡調査区全体図（S＝１：100）



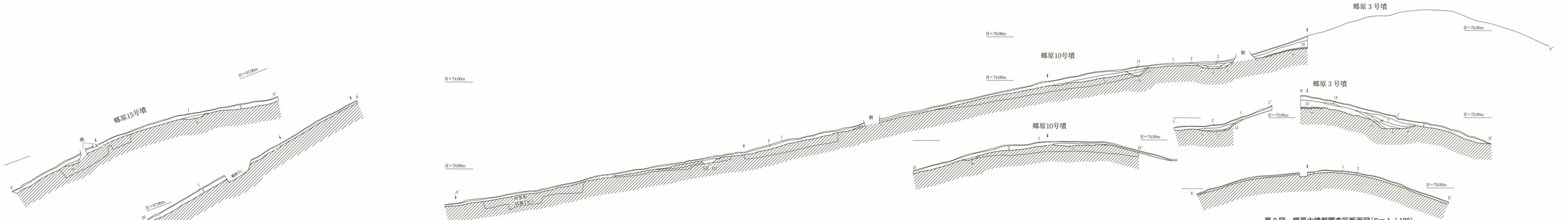


1．腐葉土（腐植土）
2．褐色粘質土（表土、0.3cm大の小礫を含む。シルト質。）
3．にぶい赤褐色粘質土（シルト質。地山礫の含みなし。）
4．にぶい赤褐色粘質土（３より暗で粘質。）
5．明褐色粘質土（0.3cm大の小礫を含む。シルト質。）
6．にぶい褐色粘質土（２cm大の地山礫を若干含む。）
7．明褐色粘質土（９と似る。橙色かかる。シルト質。）
8．明褐色粘質土
9．褐色粘質土（締まりやや弱い。）
10．明褐色粘質土（0.3～２cm大の礫を含む。シルト質。）
11．明赤褐色粘質土（0.5cm大の地山礫を含む。根の撹乱とみられる。）
12．にぶい褐色粘質土（10より粘質。0.5～1.5cm大の礫を含む。）
13．にぶい赤褐色粘質土（１～２cm大の地山礫を若干含む。）
14．明赤褐色粘質土（１cm大の地山礫を含む。）
15．にぶい褐色粘質土（19より若干明。0.5cm大の礫を含む。地山礫の含みなし。）
16．明褐色粘質土（0.3cm大の礫を含む。）
17．明褐色粘質土（16より赤褐色かかる。１cm大の地山礫を含む。）
18．明赤褐色粘質土（0.5cm大の地山礫を含む。）
19．灰褐色粘質土（粘質強。礫の含みなし。旧表土。）
20．にぶい褐色粘質土（２より若干暗で締まり弱い。0.5cm大の礫を含む。）
21．にぶい褐色粘質土（３より暗で赤褐色かかる。１cm大の礫を若干含む。）
22．明赤褐色粘質土（0.5～２cm大の地山礫を含む。
23．明褐色粘質土（やや赤褐色かかる。0.5～１cm大の礫を含む。やや締まる。）
24．にぶい赤褐色粘質土（やや締まる。0.5cm大の地山礫を若干含む。）
25．明赤褐色粘質土（１～２cm大の地山礫を含む。）
26．明赤褐色粘質土（0.3cm大の礫を含む。26より赤味強い。地山礫の含みなし。）
27．褐色粘質土（0.3～２cm大の小礫を含む。）
28．にぶい赤褐色粘質土（29よりやや暗。シルト質。）
29．にぶい赤褐色粘質土（わずかに0.5cm大の地山礫有。）
30．明赤褐色粘質土（0.5～１cm大の地山礫を若干含む。）
31．明赤褐色粘質土（２cm大の地山礫を含む。）
32．明赤褐色粘質土（31より暗。地山礫の含みなし。）
33．にぶい赤褐色粘質土（灰褐色かかる。やや締まる。地山礫の含みなし。旧地表。）
34．にぶい褐色粘質土（0.5cm大の小礫を含む。）
35．明褐色粘質土（0.5～１cm大の地山礫を含む。）
36．明褐色粘質土（35より暗で締まる。地山礫の含みなし。）
37．褐色粘質土（１cm大の地山礫を含む。）

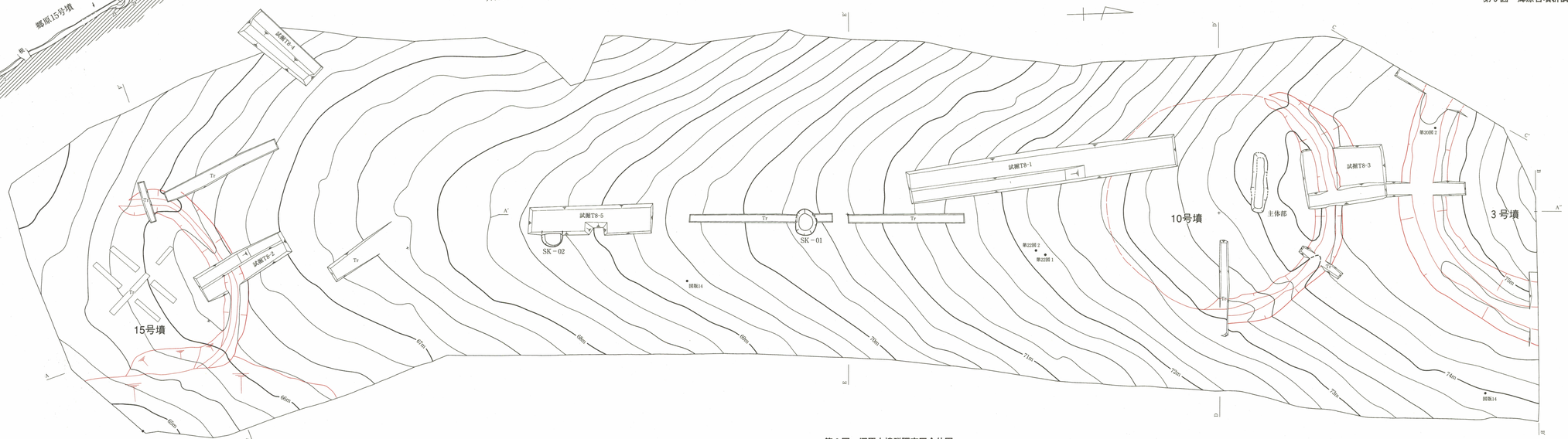
第６図　郷原13・14号墳 郷原石堂口遺跡調査区断面図（２）（Ｓ＝１：100）



第７図　郷原古墳群地形図（Ｓ＝１：200）



第 9 図　郷原古墳群調査区断面図(S＝１：100)



1．腐植土
2．褐色粘質土（赤土。0.5cm大の礫を若干含む。）
3．暗褐色粘質土（0.5cm大の礫を若干含む。）
4．暗褐色粘質土（1～2％明。0.5～1cm大の地山礫を僅かに含む。）
5．褐色粘質土（2～3％若干明。ややシルト質。）
6．暗褐色粘質土（3～2％若干暗。0.3cm大の地山礫を含む。やや粘質。）
7．灰褐色粘質土（0.5cm大の礫・地山礫を含む。）
8．にぶい褐色粘質土（橙色かかる。僅か(0.5cm大の地山礫を含む。）
9．暗褐色粘質土（締まり弱い。2cm大の地山礫を僅かに含む。）
10．褐色粘質土（0.5～2cm大の地山礫を若干含む。）
11．灰褐色粘質土（0.5cm大の礫を含む。）
12．褐色粘質土（締まり弱い。シルト質。礫の含みなし。）
13．明褐色粘質土（0.5cm大の地山礫を若干含む。）
14．明褐色粘質土（橙色かかる。0.5～2cm大の地山礫を含む。盛土。）
15．にぶい赤褐色粘質土（0.5cm大の礫・3mm大の地山礫を若干含む。）
16．黒褐色粘質土（褐灰色かかる。地山礫の含みなし。旧表土）
17．褐色粘質土（2～3％明。やや締まる。）
18．黒色粘質土（17～2％暗で赤褐色かかる。4cm大の地山礫有。）
19．にぶい褐色粘質土（やや赤褐色かかる。0.5～1cm大の地山礫を含む。）
20．褐色粘質土（2cm大の地山礫を若干含む。）
21．にぶい赤褐色粘質土（褐色かかる。崩れた5cm大の地山礫を若干含む。）
22．暗褐色粘質土（0.5cm大の地山礫を僅かに含む。）
23．暗褐色粘質土（0.5cm大の地山礫を多く含む。）
24．褐色粘質土（22～23より暗色かかる。1.5cm大の地山礫を若干含む。）
25．灰褐色粘質土（0.3cm大の地山礫を僅かに含む。シルト質。）
26．灰褐色粘質土（0.3cm大の地山礫を僅かに含む。）

0　5m

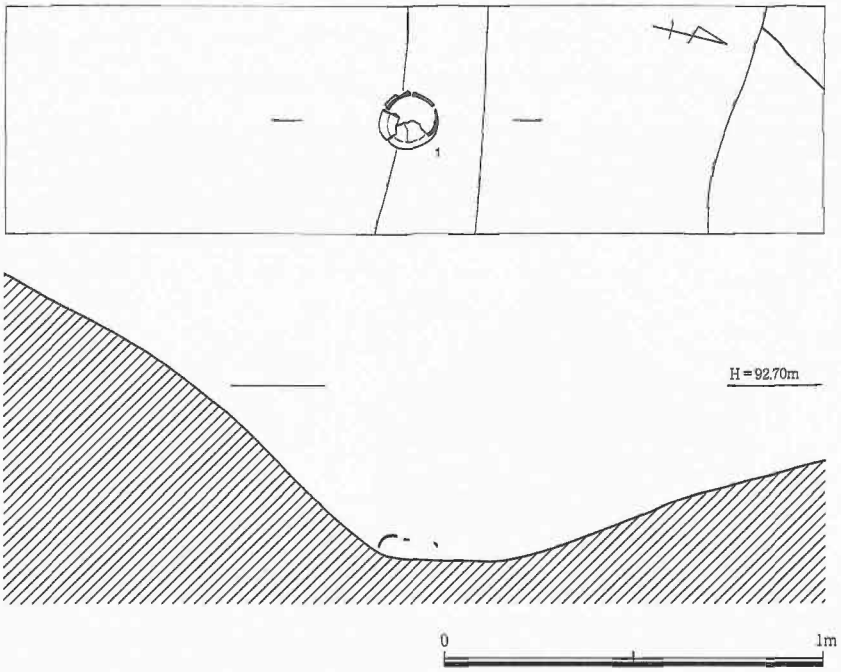
第 8 図　郷原古墳群調査区全体図

1．郷原13号墳(第３～６・10～12図、図版１～３・13)

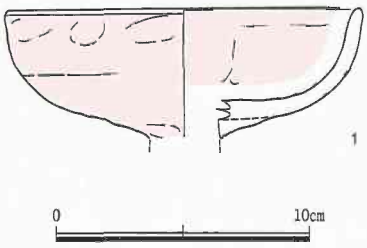
〔位置と現状〕 郷原13号墳は、北西へ延びる主稜線から北へ張り出す小尾根の頂部に立地し、標高90.25～92.55mに立地する。北の斜面低位側に14号墳が配置する。調査前の観察では、古墳と想定するには墳丘の遺存状況が芳しくなく、範囲がはっきりしない状況であった。尾根稜線は西側が馬の背状となり東側は急傾斜で谷へと続き、尾根の反対側は西側へ向けた緩斜面をもつことからかなり流失がすすんだ状態が予想された。北東側に広がる水田面からの比高差は42m程度で、三谷の小平野への見通しはやや不良である。

〔墳丘〕 表土下２～20cmで墳丘面を検出した。15×13mほどの尾根平坦面では腐植土および表土下は岩盤状の地山面であり、一部地山が露出している部分も見られた。南北主稜線方向に長軸をもつ方墳で、墳丘規模は南北19.3m、東西14.8m、墳丘の高さは北東裾から2.3mを測る。墳丘は、北へ延びる尾根を現状で幅1.1m、深さ0.4m余りの断面緩やかな台形状もしくはＶ字状の直線的な溝を掘削、尾根を切断して墓域として区画し、地山成形と掘削した土砂を北の低位側へ厚く盛土することで築造されている。盛土は、東側墳丘斜面で36cmが遺存しているが、西側の盛土は既に流失しており、堆積していた均一なシルトの土量を勘案すると墳頂部にもかなりの盛土が本来なされていたと考えられる。また、北裾から谷へ下る急斜面は古墳の高さをさらに増幅させ、東からの視覚的効果をねらったものと推察される。

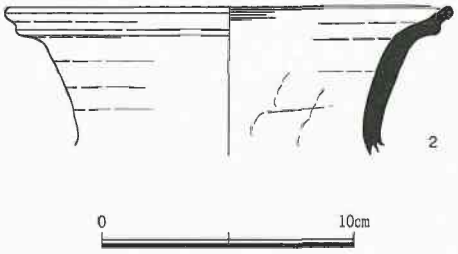
〔埋葬施設〕 墳頂部の腐植土および僅かな表土下の地山面を繰り返し精査し、中央部をＴ字状に断ち割ったが、埋葬施設はみられなかった。



第10図　郷原13号墳 南溝遺物出土状況実測図



第11図　郷原13号墳 南溝出土遺物実測図



第12図　郷原13号墳 北東裾出土遺物実測図

〔その他の出土遺物〕 南溝で河原町試掘T7-2トレンチで赤彩高杯杯部が出土しているが、そのトレンチ南側の溝底部から口縁部を下へ向けた赤彩高杯(1)が出土した。脚部は出土していない。また、北東墳丘斜面および裾部一帯の表土中より須恵器片が出土している。

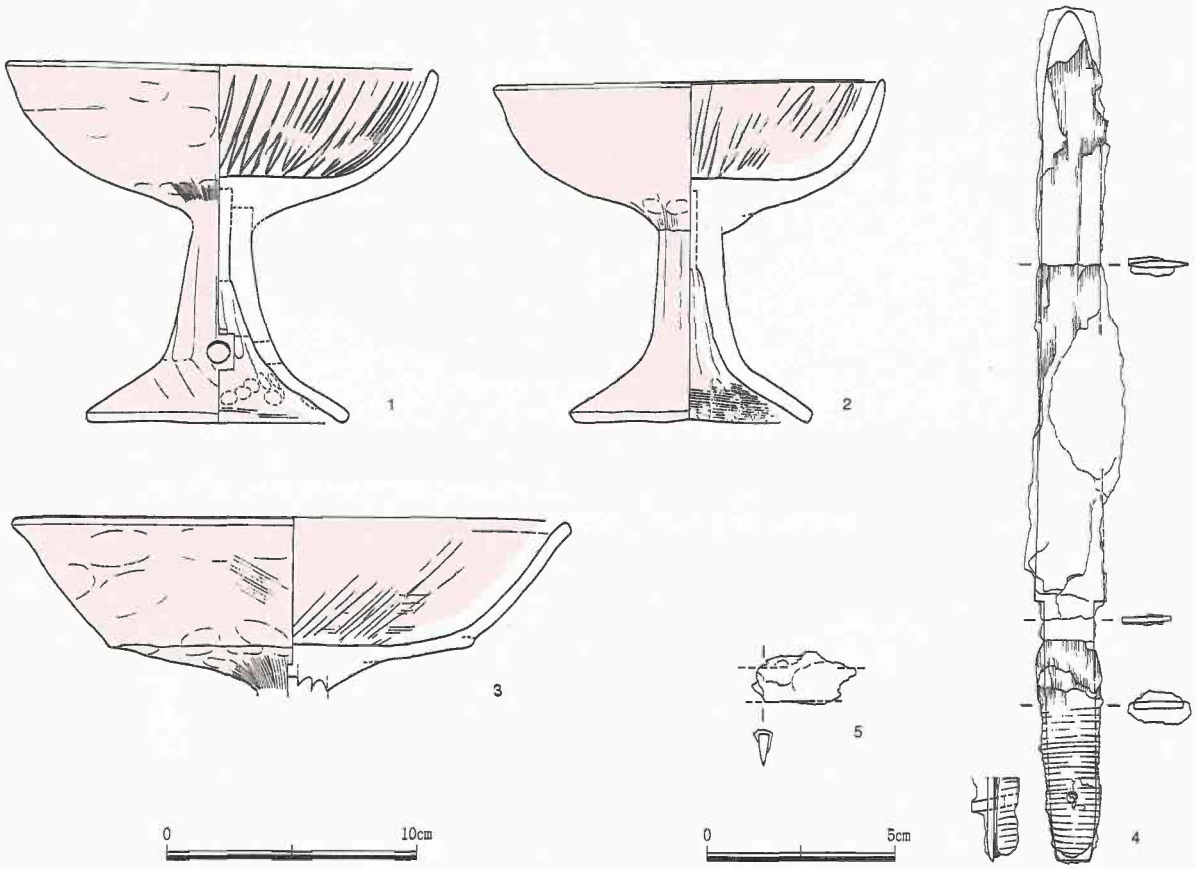
赤彩された杯部椀形の高杯(1)は口径13.8cmを測り、口縁部は内湾せず直線的に立ち上がり全体的に浅く厚い仕上がりである。北東墳丘斜面および裾部一帯で出土した須恵器のうち甕あるいは壺の口縁部(2)を図化した。口縁部屈曲も緩やかで口縁端部は丸く仕上げられている。

2．郷原14号墳(第3～6・13～17図、図版1・2・4～6・13)

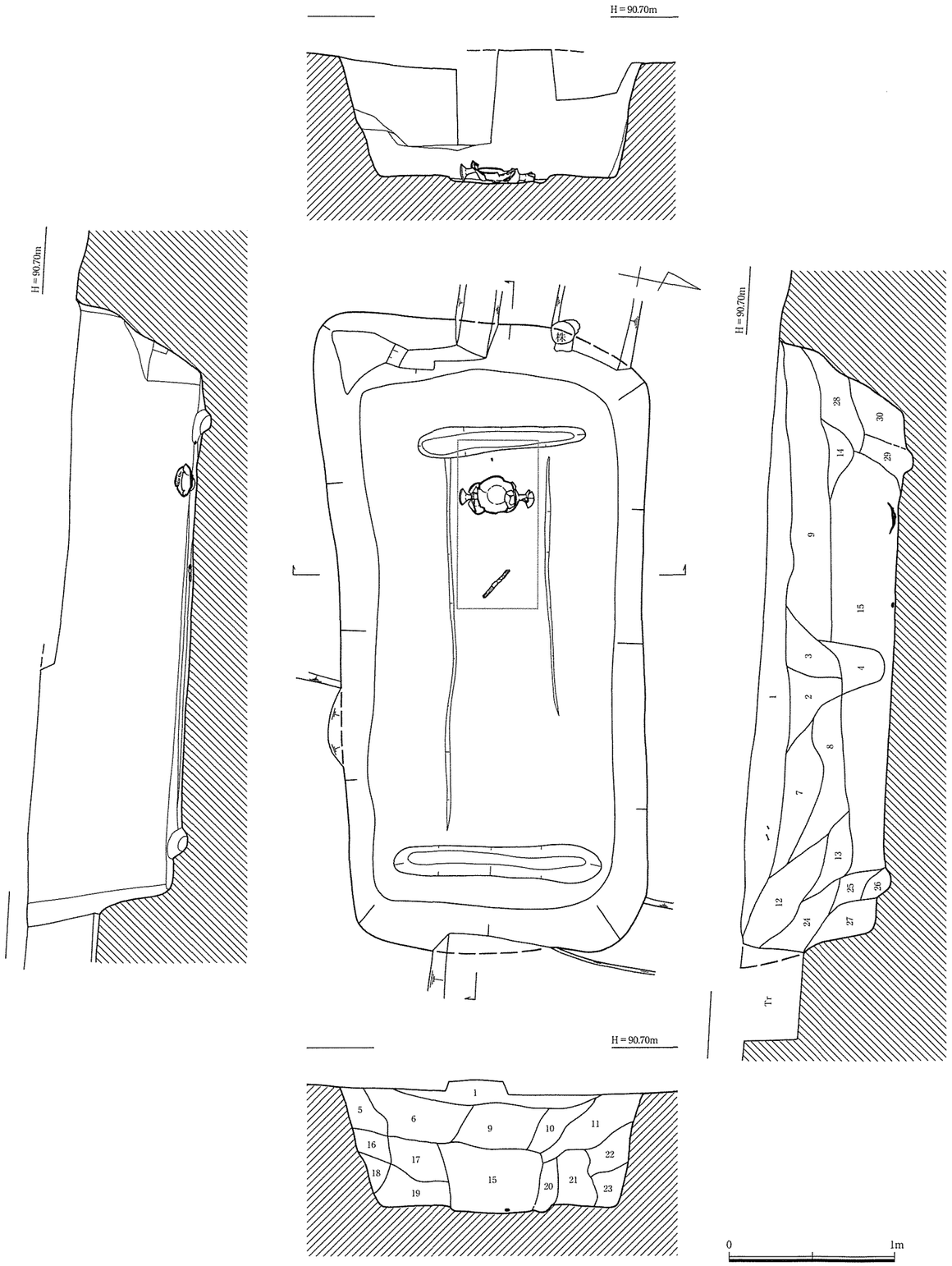
〔位置と現状〕 郷原14号墳は、北西へ延びる主稜線から北へ張り出す小尾根先端部に立地し、標高88.85～90.73mに位置する。南の斜面高位に13号墳が配置する。丘陵北東側に広がる水田面からの比高差は40m程度で、三谷の小平野への見通しはやや不良である。調査前の観察では、13号墳を下った尾根先端に10×14m程の平坦面が認められ、尾根先端頂部に立地する古墳であることが想定された。

〔墳丘〕 表土下8～10cm弱で墳丘面を検出した。墳頂部南高位側では表土下は地山面が露出し、全体的に盛土の流失がややすすむ。わずかに墳頂部の西および北側で厚さ10cm、北側墳丘斜面で28cmの盛土が確認された。尾根稜線に対し直交する軸方向がやや長い方墳で、墳丘規模は南北方向で13.8m、東西方向で16.6m、墳丘の高さは北裾から1.8mを測る。墳丘は、裾部の削り出しと南尾根高位に幅1.2m弱、深さ0.4m程の緩やかなU字もしくはL字形の溝を掘削し、北側斜面低位に盛土することで造られている。なお13号墳との前後関係は、土層断面からも明確にはできなかった。

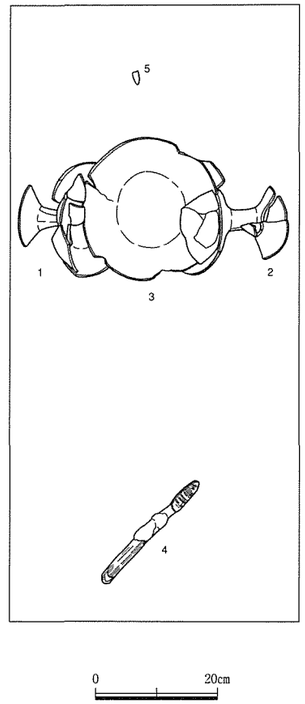
〔埋葬施設〕 墳頂部中央やや北西寄りで第1主体部、更にその墓壙北東隅から80cm北東に離れて第2主体部を検出した。いずれも尾根稜線に対し直交する主軸をとるが第2主体部は第1主体部に比べてやや北側へ軸を振る。また、溝と第1主体部の中間やや東寄りに高さ30cmの自然石の立石が見られ、標石の



第13図　郷原14号墳 第1主体部出土遺物実測図



第14図　郷原14号墳 第１主体部実測図



第15図　郷原14号墳 第１主体部
遺物出土状況実測図

1．灰褐色粘質土（締まる、土器片を含む。）
2．にぶい赤褐色粘質土（0.5cm大の礫を含む。）
3．にぶい赤褐色粘質土（２より明、締まる。）
4．赤褐色粘質土（２～５cm大の地山礫を含む、締まり弱い。）
5．橙色粘質土（0.5～２cm大の地山礫を含む。）
6．明赤褐色粘質土（１～５cm大の地山礫を含む、黄橙色かかる。）
7．にぶい赤褐色粘質土（２より暗で締まり弱い、0.5cm大の礫を含む。）
8．明赤褐色粘質土（0.5～５cm大の地山礫を多く含む。）
9．橙色粘質土（締まる、５cm大の地山礫有。）
10．橙色粘質土（１～２cm大の地山礫を若干含む、９より黄色かかる。）
11．明赤褐色粘質土（１～４cm大の地山礫を含む、締まる、黄色かかる。）
12．明赤褐色粘質土（3cm大の地山礫・0.5～１cm大の礫を多く含む、締まり弱い、赤味が強い。）
13．明赤褐色粘質土（12より暗、３～５cm大の地山礫を12より多く含む。）
14．明赤褐色粘質土（黄色かかる、締まる。）
15．赤褐色粘質土（締まりとても弱い、0.5～３cm大の地山礫を含む、よく混じった土、５cm大の地山礫有。）
16．橙色粘質土（５より暗で地山礫の含み多い、やや締まる。）
17．明赤褐色粘質土（６より暗、３cm大の地山礫を多く含む、締まる。）
18．明赤褐色粘質土（0.5～２cm大の地山礫を含む、締まる。）
19．赤褐色粘質土（3～5cm大の地山礫を多く含む、よく締まる。）
20．明赤褐色粘質土（21より締まり弱い、２～３cm大の崩れた地山礫を含む。）
21．にぶい赤褐色粘質土（３～５cm大の地山礫を含む、よく締まる。）
22．赤褐色粘質土（0.5～１cm大の礫を若干含む、地山礫の含み無し、締まる。）
23．赤褐色粘質土（22よりやや暗、0.5cm大の礫を若干含む、地山礫の含み無し、よく締まる。）
24．明赤褐色粘質土（0.8cm大の均一な地山礫を含む、やや締まる。）
25．明赤褐色粘質土（24より暗、締まり弱い、地山礫の含み少。）
26．明赤褐色粘質土（25より明で黄色かかる、地山礫の含み少、締まり弱い。）
27．にぶい赤褐色粘質土（１～３cm大の地山礫を多く含む、よく締まる。）
28．明赤褐色粘質土（14より明、0.5～５cm大の地山礫を含む、締まる。）
29．にぶい赤褐色粘質土（締まり弱い、２cm大の地山礫を僅かに含む。）
30．赤褐色粘質土（２～５cm大の地山礫を多く含む、よく締まる。）

可能性を考え周辺を精査し墳丘を断ち割ったが埋葬施設は検出されなかった。後世の境界石の可能性も考えられる。

第１主体部（第４～６・13～15図、図版１・２・４～６・13）

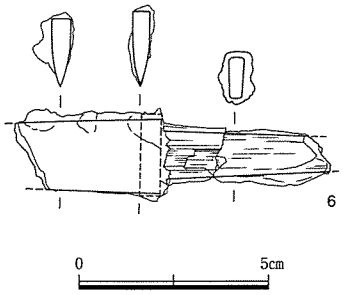
墳頂部やや北西寄りに位置する第１主体部の主軸は尾根稜線にほぼ直交するN-80°-Eをとり、墓壙は盛土上から地山を深く掘り込んでいる。平面形はやや南西隅が広がる隅丸長方形である。埋葬形態は土層断面や底部小口溝、木棺痕跡の検出から組み合わせの木棺を用いた木棺直葬と考えられる。墓壙規模は現況で長さ3.75m、幅1.90m、深さ88cmを測る。墓壙の土層断面観察から、第15層が棺埋土で、第25・26・29層が木棺の小口および側板の痕跡と思われる。棺規模は内法で幅47cm、長さ2.35m、深さ40cm弱である。墓壙底面はわずかに東へ傾斜するがほぼ平坦である。底面には西壁から33cm、東壁から18cm離れて深さ５cm程度の小口溝が掘り込まれ、東側小口溝が幅18cm程度、長さ1.23mと西側小口溝より大きい。

出土遺物は、墓壙埋土第１層から赤彩壺細片数点が出土した。また棺内西側で赤彩され暗文を施した高杯３点（１）～（３）、これら高杯と小口溝の間で鉄器片（５）、高杯から33cm東に離れて鉄剣（４）が出土した。３点の高杯は出土位置と出土状況から転用枕と考えられ、西側が頭位である。ともに杯部椀形の高杯である南側（１）、北側（２）を横倒しにして脚部を欠いて口縁部を上に向けた有段高杯（３）を挟み込むように組み合わせ配置している。頭を据え易いように（３）はやや東側へ傾斜が認められる。鉄剣（４）は被葬者の胸部あたりに斜めに置かれ、剣先を右足側へ向ける。（１）（２）はよく似通った形状、大きさ、調整であるがやや（２）が全体的に小さい。（１）は脚裾屈曲部に円孔１が穿たれる。（３）は口径21.6cm、口縁部は杯底部から直線的に開くことなしにやや湾曲気味に口縁まで立ち上がり端部はわずかに外方へ摘み出される。段がしっかりし外面は調整痕が残ることからぼってりした印象をもつ。（４）は全長22.5cmを測り、刀身部は全体が鞘の木質に覆われるが剣先は明瞭に観察される。茎部は木質および巻き締め痕が良好な状態で遺存し、目釘孔１を観察。（５）は細片で断面三角形を呈し、刀子あるいは鉄鏃の一部である可能性もみられる。（５）以外にこれに伴うあるいは類似するような鉄器片は出土していない。

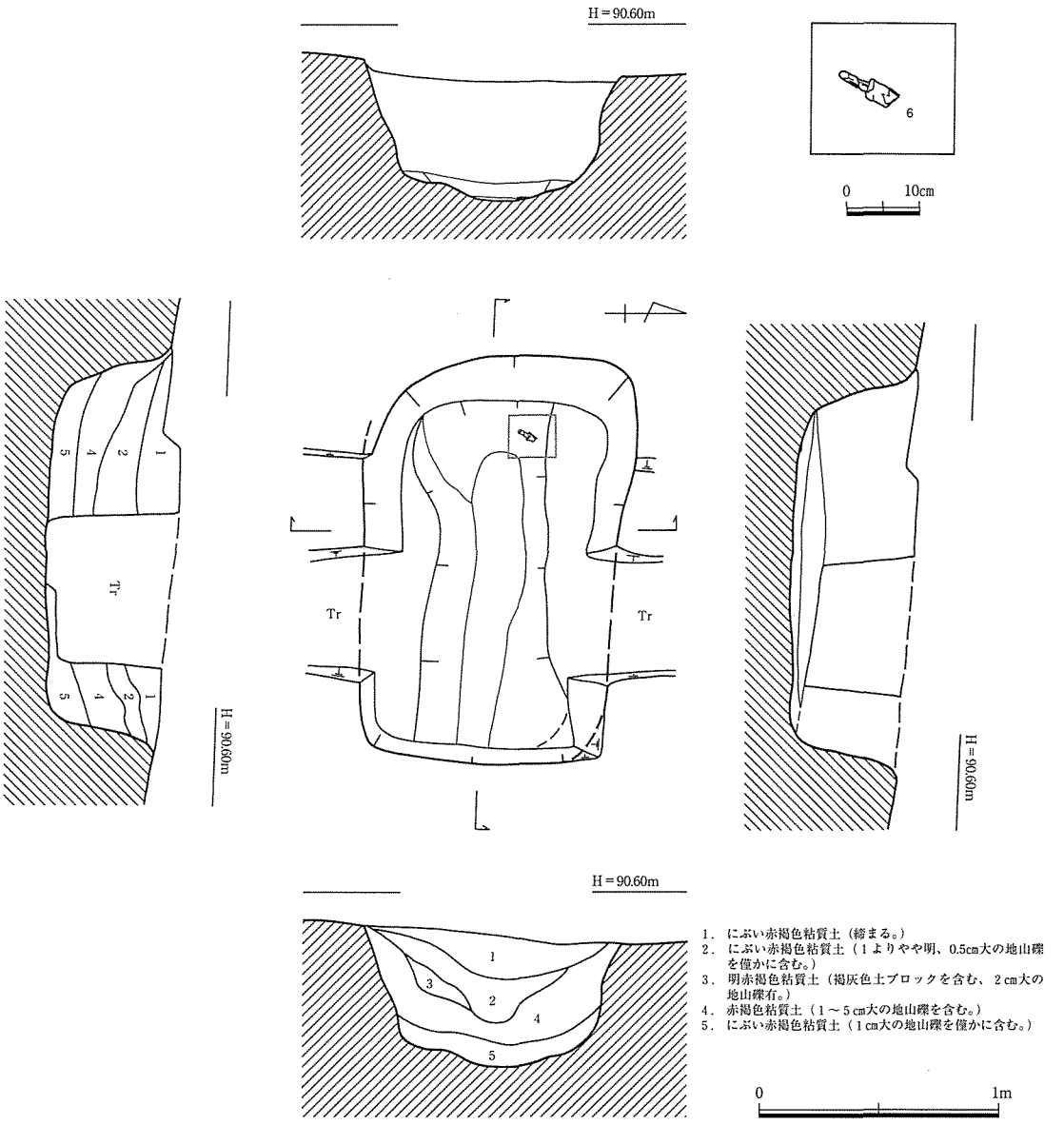
第２主体部（第４～６・16・17図、図版１・２・６・13）

14号墳の墳頂部北東端に位置し、第１主体部の北東隅に近接する。第２主体部は、墳丘に対し主軸をやや北方向のN-88°-Eへ振る。墳丘にトレンチを掘削した際に断面で主体部と確認された。土層断面の観察や底部に窪みなどがみられることから、埋葬形態は直葬とみられる。墓壙平面形は現況では東側が掘り過ぎによりやや角張ってしまったが隅丸長方形で、規模は長さ1.70m、幅1.05m、深さ53cmを測る。墓壙底部には中央へ向かって緩やかな落ち込みが見られ、長軸方向が５cm程度溝状に窪む。

出土遺物は、西側やや北寄りで刀子（６）が切先を北東へ向け出土している。墓壙の状況や刀子の出土状況から第２主体部も西側が頭位と推定される。（６）の切先部は残念ながら掘り下げの際に紛失してしまったが、土の錆付着状況からおおよその長さが推定される。遺存長8.26cm、茎部に木質が遺存し関部刀身に縁金具の痕跡が観察される。



第17図　郷原14号墳 第２主体部出土遺物実測図

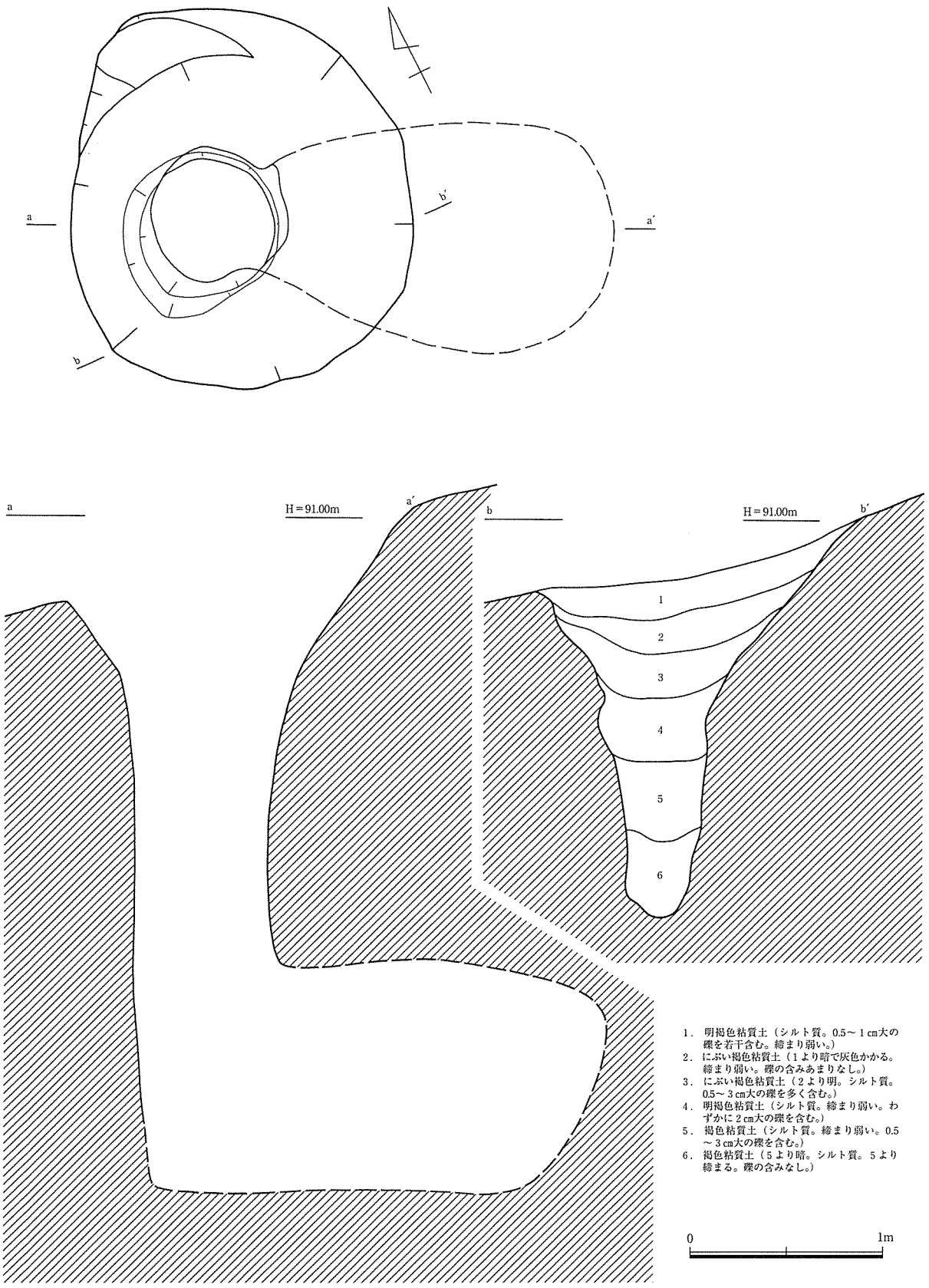


第16図　郷原14号墳 第2主体部実測図

3．その他の遺構

SK-01（第4・6・18図、図版1・2・7）

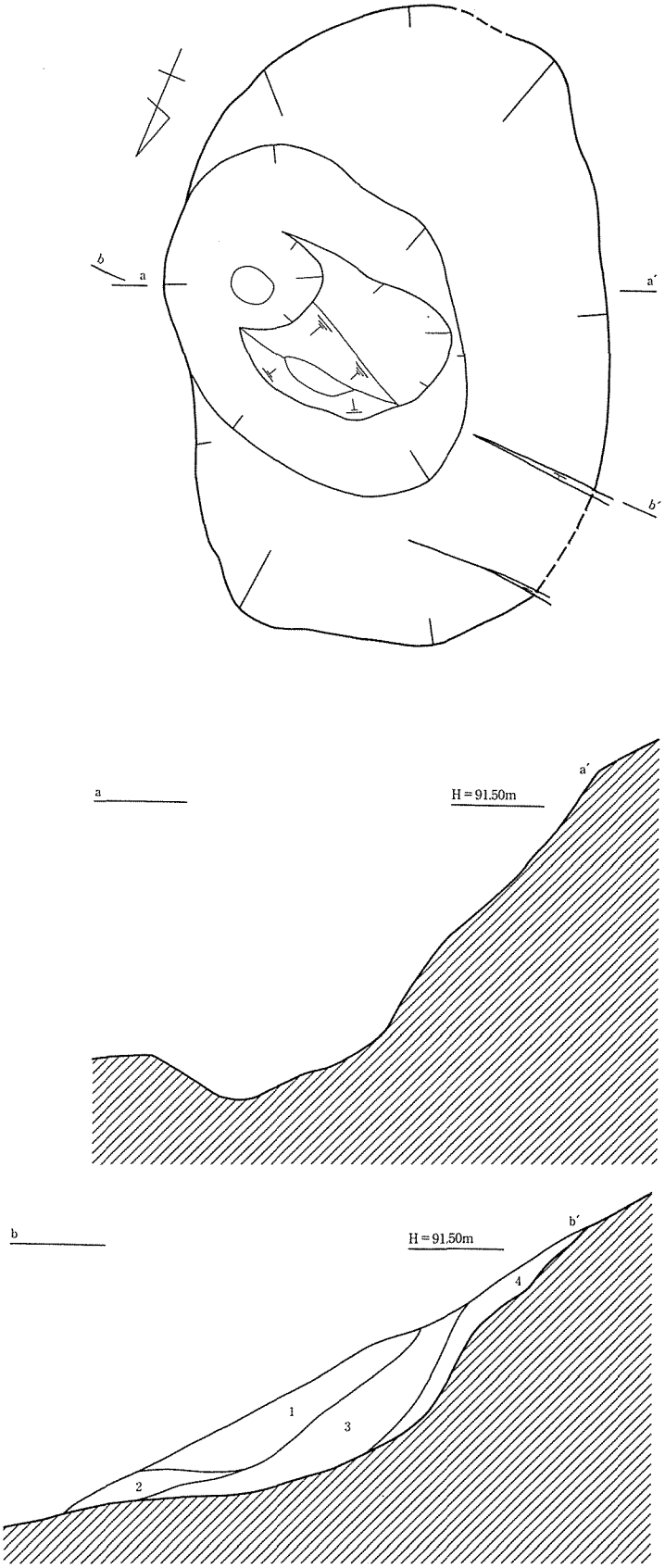
SK-01は、調査区中央部西端に位置する。13号墳の西側斜面、標高87.53～91.05mに立地する。13号墳を挟んで東側斜面にSK-02が配置する。規模は上面で長径1.95m、短径1.77mを測り平面北西側がやや広がる楕円形を呈する。断面は上面から1m程度はすり鉢状であるが、そこから下位は急激に落ち込み、壁面に若干の凹凸も認められる。底面まで深さ3.52mを測る。底部には斜面高位の南東側へ開口する横口部が見られ、天井の崩落のため完掘はしていないものの開口部からの奥行きは1.7mを測る。横口部は高さ1.2m程があり、大人でも座って十分に入り込める空間となる。埋土はいずれも締まりのみられないシルト質の流土である。人為的に埋めたような痕跡は観察されなかった。出土遺物も見られなかった。



第18図　郷原石堂口遺跡SK-01実測図

SK-02(第４・６・19図、図版１・２・７)

SK-02は、調査区中央部東端に位置する。13号墳の東側斜面、標高90.23～91.65mに立地する。13号墳を挟んで西側斜面にSK-01が配置する。規模は上面で長径2.73m、短径1.88mを測り平面やや角張る長楕円形を呈する。主軸はN-23°-Wへ振る。13号墳の盛土上から掘り込み、上面に13号墳からの流土、表土に覆われる。東側が斜面低位になることから元々の大きさなどは不明であるが、断面は緩やかな椀状である。中央東側で一段深くなり平坦面をとって更に東端が深く窪む。出土遺物は上層の表土中から須恵器細片が出土したのみである。



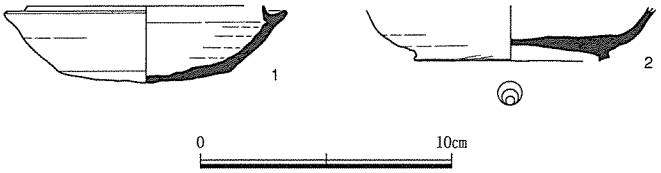
1．褐色粘質土（炭片を含む。0.3cm大の礫を含む。）
2．褐色粘質土（１cm大の地山礫を含む。１よりやや明）
3．にぶい褐色粘質土（１～２cm大の地山礫を含む。）
4．橙色粘質土（やや赤褐色かかる。締まる。0.3cm大の礫を含む。）

0　1m

第19図　郷原石堂口遺跡SK-02実測図

第２節　郷原古墳群の調査（第２・７～９・20～25、図８～14）

１．郷原３号墳（第２・７～９・20図、図版８・９・13・14）



第20図　郷原３号墳 周溝出土遺物実測図

〔位置と現状〕 郷原３号墳は、北西へ延びる丘陵主稜線から南へ張り出す支稜線上、標高74.50～76.80mに位置する。南の斜面低位に10号墳が配置する。丘陵北西側に広がる水田面からの比高差は26m程度で、三谷の小平野への見通しは良好である。調査前の観察では、容易に古墳と認識されるほど墳丘の高さが認められ遺存状態も良好であった。規模も比較的大きく、郷原古墳群の中で中核となる古墳であろうと予想された。

〔墳丘〕 表土下10～20cm弱で墳丘面を検出した。今回調査は南側５分の２程度の調査であるが、周溝の遺存状態も良好で、墳頂部まで達しないものの墳丘の断ち割りによって南側で盛土の厚さ36cmと旧表土を確認した。墳丘規模は15m、墳丘の高さは東裾から2.3mを測る。墳丘は、裾部の削り出し周溝の掘削によって南東側斜面低位に特に多くの盛土することで造られている。なお10号墳とは境界を接しない。

〔埋葬施設〕 調査区域外のため検出できなかった。

〔その他の出土遺物〕 周溝内から遺物が出土している。南東周溝内の埋土から須恵器数点が出土しておりそのうち杯身（１）を図化した。また、南西周溝底部近くで底部糸切りの杯底部（２）が出土しているが、古墳に伴う遺物とは考え難い。更に３号墳東の斜面で須恵器体部片が出土している。３号墳に伴う遺物かどうかは不明である。

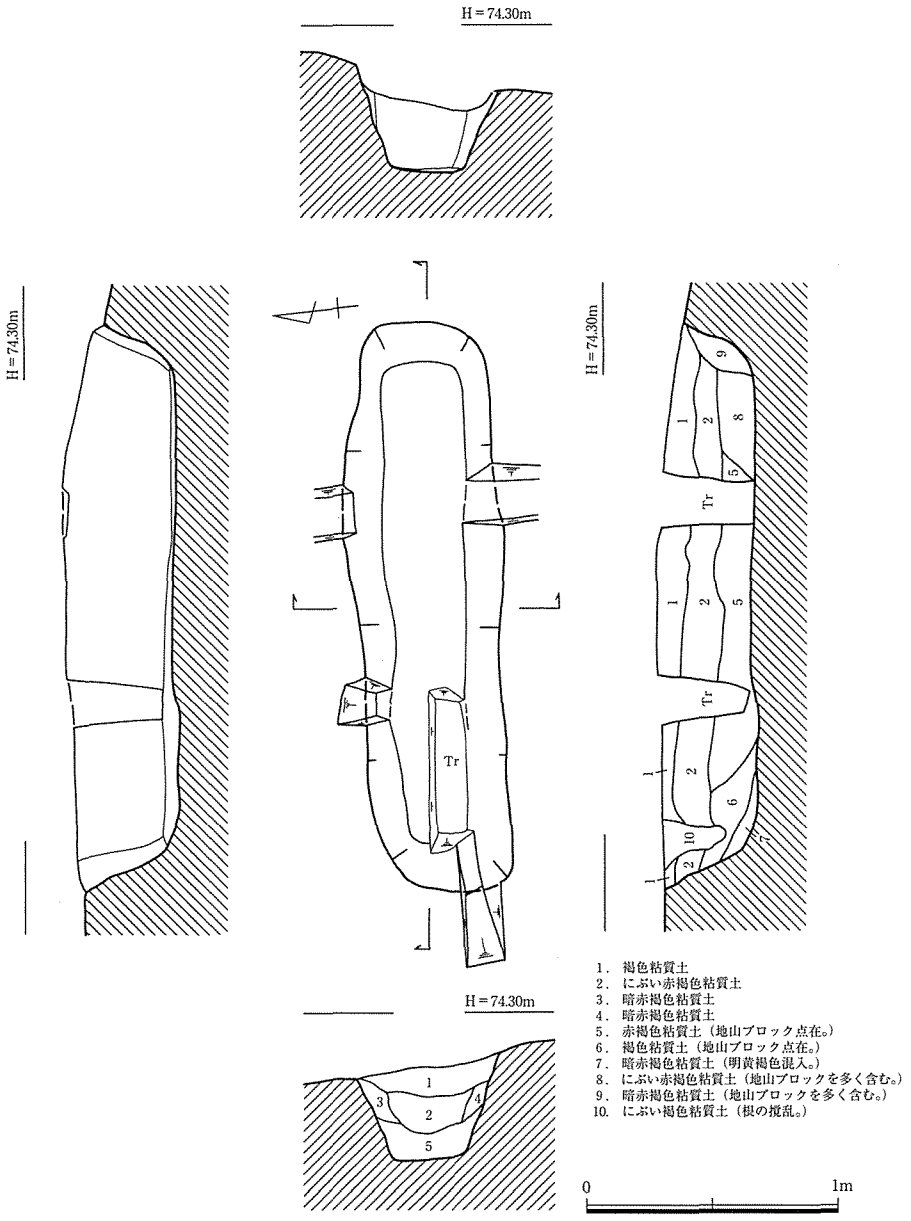
２．郷原10号墳（第２・７～９・21・22図、図版８～11・14）

〔位置と現状〕 郷原10号墳は、北西へ延びる丘陵主稜線から南へ張り出す支稜線上、標高74.50～76.80mに位置する。北の斜面高位に３号墳が尾根の30m低位には15号墳が配置する。丘陵北西側に広がる水田面からの比高差は26m程度で、三谷の小平野への見通しは良好である。調査前の観察では、３号墳に伴う平坦面のように思われ、河原町試掘T8-3トレンチによって確認された周溝状の溝状遺構の存在から古墳の存在が判明していた。目測で古墳と認識されるほど墳丘の高さは認められない状態であった。

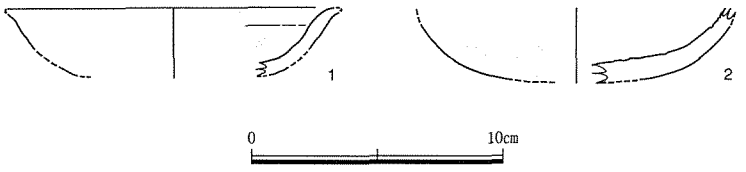
〔墳丘〕 表土下10～20cm弱で墳丘面を検出した。斜面高位側に弧状に検出された周溝によって墳丘規模は8.5m、墳丘の高さは東裾から1.5mを測るが、かなり流失がすすむ。墳丘の断ち割りによって斜面高位側に厚さ14cm程度の盛土を確認した。墳丘は、裾部の削り出し周溝の掘削によって南側斜面低位側に多くの盛土することで造られている。なお３号墳とは境界を接しない。

〔埋葬施設〕 墳頂部北側尾根高位側で主体部を検出した。墓壙平面は、やや不整な隅丸長方形を呈する。規模は、現況で遺存長2.25m、幅0.64m、深さ42cmを測る。主体部の主軸は尾根筋に対し直交方向のN-88°-Eへ振る。土層断面の観察から木棺の痕跡は認められず埋葬形態は直葬とみられる。遺物は出土しなかった。

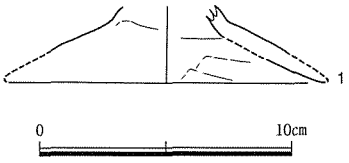
〔その他の出土遺物〕 10号墳南東の斜面で土師器口縁部（１）椀底部（２）が出土している。10号墳に伴う遺物の可能性がある。



第21図　郷原10号墳 主体部実測図



第22図　郷原10号墳 南東裾出土遺物実測図



第23図　郷原古墳群 D4杭東斜面出土遺物実測図

3．郷原15号墳（第２・７～９図、図版８・11）

〔位置と現状〕 郷原15号墳は、北西へ延びる主稜線から南へ張り出す支稜線がやや南東へ向きを変える変換部、標高65.98～66.35mに立地する。10号墳から30m弱丘陵下位にあたり、15号墳から下位には９号墳、８号墳が配置する。丘陵西側に広がる水田面からの比高差は16m程度で、三谷の小平野への見通しがわずかにきく。調査前の観察では、墓地が調査区南に尾根を掘削して造成されており、尾根筋の変換部にもあたることから古墳の存在が予想された。しかしながら目測では墳丘上の高まりはさほど認められなかった。

〔墳丘〕 表土下10～20cm弱で墳丘面を検出した。硬く締まった均一な層であり、トレンチで確認したところ地山面であることが判明し、旧地表面および盛土は既に流失していた。斜面高位側に遺存していた弧状の周溝から径７m程の規模の円墳である。現状での墳丘の高さは東裾から0.37mを測る。

〔埋葬施設〕 墳頂部を精査後トレンチ掘削により確認したが埋葬施設は検出できなかった。流失したとみられる。

〔その他の出土遺物〕 15号墳東の斜面で須恵器片２点が出土している。15号墳に伴う遺物かどうかは不明である。

4．その他の遺構と遺物（第２・７～９・23～25図、図版14）

〔その他の出土遺物〕

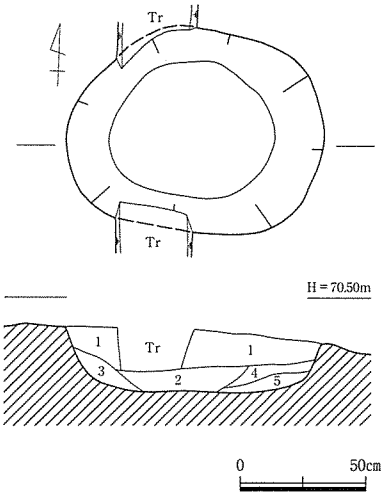
調査区内から古墳や遺構に伴わない遺物を数点検出しているC2杭東側2.8mで須恵器高杯脚部片、D4杭東側斜面で赤彩とみられる高杯脚裾部（１）が出土している。脚部径12.4cmとやや大きく、端部は細く仕上げられている。

SK-01（第８・９・24図、図版12）

調査区中央部の尾根稜線上、標高70.13～70.38mに立地する。尾根低位の約9m南にSK-02が配置する。規模は長径1.02m、短径0.82mを測り平面やや角張る楕円形を呈する。主軸はN-82°-Wへ振る。断面は椀状で検出面からの深さ25cmを測る。埋土は５層に分かれいずれも炭片を含むが、中央下層の第２層中に多くの炭片を含む。遺物は出土していない。

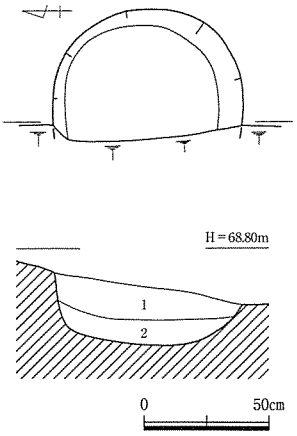
SK-02（第８・25図、図版12）

調査区中央部の尾根稜線上、標高68.42～68.71mに立地する。尾根高位の約９m北にSK-01が配置する。河原町試掘T8-5トレンチで西側を掘削される。規模は現況で南北長径0.75m、遺存短径0.51mを測る。平面は円形もしくは楕円形になるものとみられる。断面は椀状で検出面からの深さ29cmを測る。埋土は２層に分かれ下層の第２層は炭片・焼土ブロックを多く含む炭化層である。遺物は出土していない。



1．にぶい褐色粘質土（僅かに炭片を含む。）
2．灰褐色粘質土（炭片を多く含む。）
3．にぶい褐色粘質土（１よりやや明。炭片を含む。0.3cm大の地山礫を含む。）
4．灰褐色粘質土（２より炭片の含み少。0.3cm大の地山礫を含む。）
5．にぶい褐色粘質土（１～1.5cm大の地山礫を含む。僅かに炭片を含む。）

第24図　郷原古墳群 SK-01実測図



1．にぶい褐色粘質土（僅かに炭片を含む。）
2．褐灰色粘質土（炭片・焼土ブロックを多く含む。）

第25図　郷原古墳群 SK-02実測図

郷原13号墳（第12図）

（　）復元値　〈　〉推定値

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	高杯	①（13.8）	椀状の杯部。 口縁部は内湾して上方に納め、端部は丸い。	(外)ナデ、成形痕。 (内)ナデ。	①1㎜前後の砂粒を含む 3㎜の砂礫有 ②やや不良 ③淡橙色	(口)　1/2	赤彩 黒斑有	12
2	須恵器 甕	①〈17.3〉	口縁部は外反して開き端部で段を持ち外上方へ摘む。	(内外)ヨコナデ。 (内)頸部、成形時の圧痕、ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②良好 ③灰色	(口)　一部 (口頸)　1/6		15

郷原14号墳（第13図）

1	高杯	①　16.65 ②　10.2 ③　14.1	椀状の杯部。脚部は差し込み式。口縁部は外傾し端部は丸い。脚部は基部から緩やかに開いて下半でハの字状に開き2は裾端面を持つ。1は下半部に円孔1を外面より穿つ。	杯部(外)ナデ、成形痕。 (内)ナデ。 接合部(外)ナデ、ハケ目。 (外)上半工具ナデ、下半ナデ。 (内)ナデ、絞り目痕、ハケ目痕。 赤彩の後放射状の暗文を2段に施す。	①1～2㎜の砂粒を多く含む 4～6㎜大の砂礫有 ②良 ③橙褐色	ほぼ完存	赤彩	2
2	高杯	①（15.75） ②　(9.25) ④　13.4			①1㎜前後の砂粒を多く含む 3・4㎜大の砂礫有 ②良 ③淡橙褐色	ほぼ完存	赤彩	3
3	高杯	①（21.6）	有段の杯部。 口縁部は外傾して立ち上がり、端部で外反、丸みを持つ。	杯部(外)ナデ、成形痕。 (内)ナデ、ハケ目痕。 接合部(外)ナデ、ハケ目。 赤彩の後、放射状の暗文を施す。	①1～2㎜の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	(杯)ほぼ完存	赤彩	1

郷原14号墳　鉄製品（第13・17図）

出土地	挿図番号	器種	全長	法量 刀部 長さ	刀部 断面形	茎部 長さ	茎部 断面形	断面 計測部位	断面 幅	断面 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
14号墳 第1主体部	4	鉄剣	22.5	15.6	(菱形)	7.8	長方形	剣身中央部 茎基部 茎中央部	1.62 1.33 1.28	0.2 0.16 0.22	銹化する。 鞘、柄の木質遺存。 直角両関。 茎部に目釘孔1、目釘遺存。巻き締め痕、顕著に残る。	剣身完存	48.432g	4
	5		(2.8)	(2.8)	二等辺三角形				0.87	0.30	刃部？	一部	(3.172)g	5
14号墳 第2主体部	6	(刀子？)	(8.26)	(3.88)	二等辺三角形	(4.38)	長方形	刀身元部 茎基部	1.98 1.10	0.5 0.42	銹化する。 背、刃関有。 刀身元部に録金具の痕跡。 茎部木質痕。	刀身元部 / 茎部	(18.643)g	11

郷原3号墳（第20図）

1	須恵器 杯身	①　(9.1) ④　(3.1)	立ち上がりは短く内傾、端部は丸い。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部ヘラ切り後ナデ。 (内)底部ナデ。	①0.5㎜前後の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②良好 ③灰色	(口)　1/4 (底)　1/2		2
2	須恵器 (高台部)	②　7.5	底部糸切り後、高台部ヨコナデによる貼付。	(内)底部丁寧なナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②良 ③淡灰色	(底)　1		1

郷原10号墳（第22図）

1	土師器 (杯部)	①〈13.0〉		全体に風化剥落、調整不明瞭。	①0.5㎜前後の砂粒を含む 2㎜前後の砂粒有②良 ③橙色		赤彩	6
2	土師器 椀		内湾して開く体部から口縁部へ続く。	風化剥落、調整不明瞭。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 3㎜以下の砂粒有②不良 ③燈褐色	(底)　1/3	赤彩	5

郷原古墳群　遺構外（第23図）

1	(脚裾部)	①〈12.4〉		風化剥落調整不明瞭。 (外)ナデ。	①7㎜大の砂礫有 ②やや不良 ③にぶい黄橙色	(裾)　1/8		12

第3節　まとめ

今回、郷原石堂口遺跡、郷原古墳群と三谷の谷の小平野を隔てた丘陵部二ケ所の調査地から、古墳時代中～後期の古墳5基、時期不明の土坑4基を検出した。出土した遺物は、土師器、須恵器、鉄剣、刀子、鉄器片があり、コンテナ(容量54×34×20㎝)約3箱分である。これらの調査地はどちらも郷原古墳群に属するが、郷原石堂口遺跡については、郷原古墳群の分布範囲内に在りながらも、古墳以外の性格を有する遺跡の可能性もあることから試掘時[1]にこの名称での登録となり、結果、古墳2基と土坑2基が検出された。郷原石堂口遺跡の130m西側の丘陵西斜面では郷原地才エ下平遺跡が現在調査されており、今回土坑の検出やこれら一連の遺跡が広がる範囲との理解から郷原石堂口遺跡の名称に従った。よって、郷原石堂口遺跡で検出された郷原13号墳と14号墳、郷原古墳群で今回調査の郷原3号墳、10号墳、15号墳とは同一の古墳群中にありながらも立地、支群を異とする。

郷原13・14号墳　これら2基の古墳は、北西へ延びる丘陵主稜線から北へ短く張り出す比較的幅のある支稜線頂部の標高92mに築造されている。北側および東側に三谷の小平野が広がるが、北西に広がる郷原地区への見通しはあまりきかない。北西隣の別の支稜線には昭和30年に調査された郷原1号墳[2]、2号墳が、北東隣の支稜線には平成16年に調査された11号墳[3]、12号墳が配置している。1、2号墳や11、12号墳の分布状況などからもこの主稜線近辺では尾根先端部に2基を一つの単位としたようである。円墳の1、2号墳や11、12号墳と異なり方墳である13、14号墳は、尾根筋に対し墳丘長辺が並行する。立地する尾根の長さから2基がちょうど納まるような大きさであり、13号墳南の斜面高位15mで鞍部となる自然地形であるにも係わらずわざわざ尾根幅の広い部分を溝で分断して13号墳の墓域を設けている。尾根の先端側を強く意識した結果とみられる。13、14号墳の築造前後関係は明らかではないが、13号墳は尾根頂部に立地し、13号墳とやや比高差のある14号墳は平坦面の造成に主眼を置いた裾部のはっきりしない造りとなっていることから、おそらく13号墳を築造した段階で予め14号墳の築造が計画されていたと考えられよう。尾根高位側により長く溝を開削することで掘り上げた土を盛土として活用できたのかもしれない。また尾根筋東側に極力寄せて築造されていることから、尾根斜面を利用して墳丘の高さ感を増幅させることで平野部側からの視覚効果を狙ったと考えられよう。13号墳は長辺19.3m、短辺14.8m、高さ2.3mと中期の方墳としては立派な規模である。

埋葬施設は、13号墳は残念ながら流失、14号墳は第1主体部が木棺直葬、第2主体部が直葬である。第1主体部、第2主体部ともに長さに対し幅、高さともしっかり掘り込まれた隅丸長方形の墓壙で、尾根筋に対し直交する軸をとる。第1主体部は二段掘墓壙にはせず、底面両小口側に小口溝を掘り込み中央に木棺を設置する。棺は内法で長さ2.35m、幅47㎝、高さ40㎝程度である。頭位は第1、第2主体部ともに西側であり、足元下に東側平野部が広がる配置である。また、第1主体部では赤彩高杯3個を用いた転用枕が検出され、中央に脚を欠いた有段高杯を置き左右を完形の椀形高杯で支えるタイプである。高杯は5世紀中葉期の所産とみられる。径8mの郷原1号墳の調査でも中心主体とみられる箱式石棺から転用枕とみられる高杯が検出されており、実測図を見る限り脚部を欠いた高杯杯部を3個の完形脚部で支えるタイプのようで打ち欠いた脚部も棺内に置く。高杯実測図の形態からみると14号墳よりやや下る時期のように見受けられる。径7mの郷原11号墳は木棺直葬で墓壙内より須恵器蓋杯などのセットが棺上に置かれた状況で出土している。6世紀後半の築造とみられる。その他供献土器として14号墳第1主体部墓壙上面で赤彩された壺の破片数点が、13号墳では南溝から試掘時も合わせて脚を欠いた赤彩高杯2点が検出されている。

郷原3・10・15号墳　これら3基の古墳は、三谷川東岸丘陵の北西へ延びる主稜線から南西および南へ下る支稜線上、標高66～76mに立地する。三谷の谷口から中位にあたり、三谷の小平野を西側に望む。山手森谷上分遺跡が広がる現在ゴミ処理場が営まれている南西に大きく張り出す幅広の尾根から屈曲を変えて南へ細く延びる支稜線上にこれら3基の古墳は立地する。同一尾根上には、尾根の高位側に全長30.5mの前方後円墳である郷原7号墳を軸に円墳である4～6号墳の計4基がまとまって分布する。そこから100m程尾根を下った位置に円墳の3号墳、10号墳が、更に30m程下って尾根の先端部へ向けて円墳の15号墳、9号墳、8号墳が配置する。3号墳の上には古墳の可能性が考えられる高まりが観察されることから、この尾根では基本的に3基がグループ単位とみられる。古墳の築造は尾根高位側を中心に弧状の溝を掘削しその土を低位側程厚く盛土することで墳丘を形造っており、中期以降の築造の特徴を有する。古墳の時期については、3、10、15号墳で確実に古墳の時期を示す遺物がみられないことから推測の域を出ないが、3号墳周溝で出土した須恵器杯身片や10号墳の墳丘外ながら南東斜面で出土し

古墳・埋葬施設一覧表

名称		墳丘 形状	規模(m) 長径×短径×高さ (辺) (辺)	埋葬施設等 主体部名	埋葬方法等	棺規模 長さ×幅×高さ(m)	墓壙等 平面形態	墓壙等 長さ×幅×深さ(m)	方位	出土遺物 埋葬施設	出土遺物 墳丘・周溝その他	時期
郷原石堂口遺跡	郷原13号墳	方墳	19.3×14.8×2.3	主体部流失						—	高杯(周溝) 須恵器片(北東裾)	〈古墳時代中期中葉〉
	郷原14号墳	方墳	16.6×13.8×1.8	第1主体部	木棺直葬	2.35×0.47×0.4	隅丸長方形	3.75×1.90×0.88	N-80°-E	壺(上層) 高杯、鉄剣、鉄器片	須恵器細片(墳頂部)	古墳時代中期中葉
				第2主体部	直葬	—	隅丸長方形	1.70×1.05×0.53	N-88°-E	刀子		
郷原古墳群	郷原3号墳	円墳	15×—×2.3	主体部未掘(調査区域外)						—	須杯身・糸切底部(周溝) 須甕片(外・南東)	〈古墳時代中後期〉
	郷原10号墳	円墳	8.5×—×1.5	主体部	直葬	—	隅丸長方形	2.25×0.64×0.42	N-87°-W	—	椀(外・南東)	〈古墳時代中後期〉
	郷原15号墳	円墳	7×—×0.37	主体部流失						—	須恵器片(外・南東)	〈古墳時代中後期〉

( )遺存値 〈 〉推定

土坑一覧表

名称		法量(cm) 長径	短径	深さ	床面標高(m)	主軸方向	平面形	断面形	出土遺物等	時期
郷原石堂口遺跡	SK-01	195	177	352	87.53	——	楕円形	U字状	——	——
	SK-02	273	188	142	90.23	N-23°-W	長楕円形	(不整椀状)	——	——
郷原古墳群	SK-01	102	82	25	70.13	N-82°-W	楕円形	椀状	——	——
	SK-02	75	(51)	29	68.42	——	〈楕円形〉	椀状	——	——

( )遺存値 〈 〉推定

た土師器椀などから、概ね中期後半から7世紀初め頃にかけて築造されたと考えられる。郷原7号墳についても、その規模や周囲の古墳の配置、立地や前方部の向きなどを考慮すると、これらとそう変わらない時期の可能性が大きい。

唯一埋葬施設が明らかとなった10号墳主体部は、長さ2.25m、幅64cm、深さ42cmを測る。土層断面から直葬とみられ、14号墳第1主体部の棺規模と比べると10号墳が底部幅30cmとなるが似かよっており、人一人を埋葬するにちょうどの大きさを墓壙サイズとしている状況が窺える。

このように、同じ郷原古墳群であっても谷を隔てた、13・14号墳と、3・10・15号墳とでは立地や古墳の内容など性格が異なることが明らかとなった。また尾根単位によって様相が異なるようであり、13、14号墳は中期中葉の段階でも方墳を採用し、築造方法も前期からの系譜を引く。ただ、古墳群自体の時期的な受容や変化は、鳥取平野の状況と大きく変わることはなく、箱式石棺や円墳、須恵器の棺外副葬の導入、木棺が箱式石棺より上位の認識など古墳群や尾根単位で差は認められようが、前方後円墳の築造が始まり円墳を含め墳丘規模の大型化がみられる中期前半期を1つのピークとして、郷原地域周辺でも同様な動きが看取できる。また、横枕地域で盛んに採用された「土器枕」も郷原地域で確認された。今後は鏡2面を輩出した山手古墳群、千代川対岸などの周辺地域を含め前期からの古墳の状況が明らかになれば内容がさらに深化できよう。

郷原古墳群の北側前方に大きくそびえる霊石山を隔て、鳥取平野南西部では千代川西岸で次々に古墳群の調査がすすみ、横枕を中心とした地域では、千代川の水運を背景に豊富な鉄の副葬が目立ち、湖山池南東岸地域、鳥取平野南部地域に対し、第3勢力とでも言うべき一大勢力があったことが指摘されている[4]。更に千代川を遡った国中平野入口の郷原地区は地理的にも重要な位置を占め、私都川流域の後期有数の古墳群である福本古墳群、7世紀後半建立の土師百井廃寺[5]、官衙推定地である万代寺遺跡[6]など古代の重要遺跡を抱える国中平野地域、鳥取平野地域と、それぞれを細かく比較検討することで古墳時代および古代、中世にかけての動向がより明らかとなっていくものと思われる。

註(1) 河原町教育委員会『河原町内遺跡発掘調査報告書』2004年
(2) 大村雅夫・森田純一「因幡・郷原1号墳」『佐々木古代研究室月報 ひすい 50号』1958年
(3) 河原町教育委員会『河原町郷原11号墳発掘調査報告書』2004年
(4) (財)鳥取市文化財団『横枕古墳群Ⅱ』2003年
(5) 郡家町教育委員会『土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅰ』1979年
郡家町教育委員会『土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅱ』1980年
(6) 郡家町教育委員会『万代寺遺跡発掘調査報告書』1983年

図　　版

郷原石堂口遺跡
調査地遠景
（北東から）

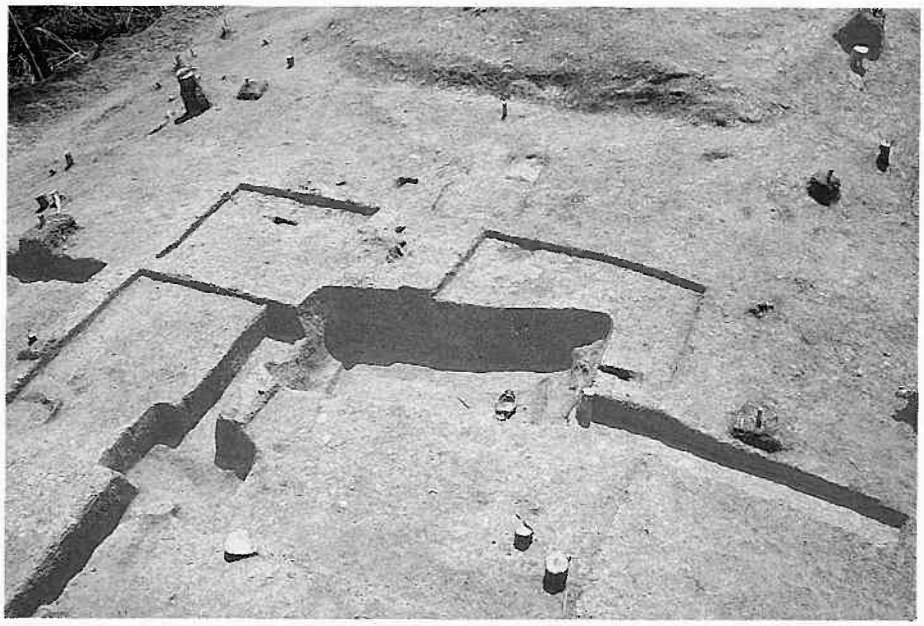
郷原石堂口遺跡
調査前
（北から）

郷原石堂口遺跡調査区土層ベルト設定状況（北西から）

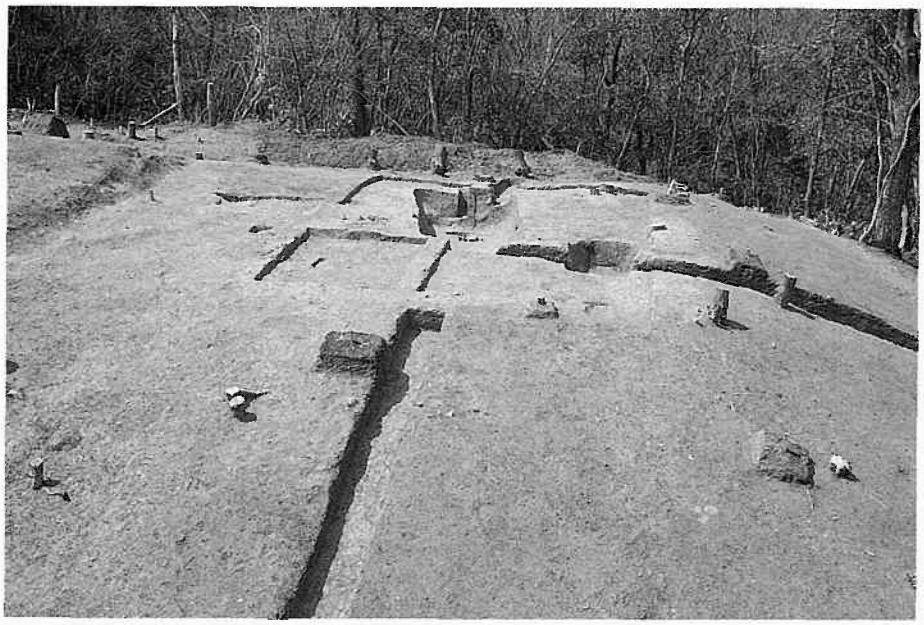
郷原石堂口遺跡調査区全景（北西から）

図版 2

郷原石堂口遺跡
郷原13号墳全景
（北西から）



郷原石堂口遺跡
郷原14号墳墳頂部
（北西から）



郷原石堂口遺跡
郷原14号墳全景
（北東から）

郷原石堂口遺跡
郷原13号墳
墳丘東斜面土層断面
（SK-02部分を含む）
（北から）

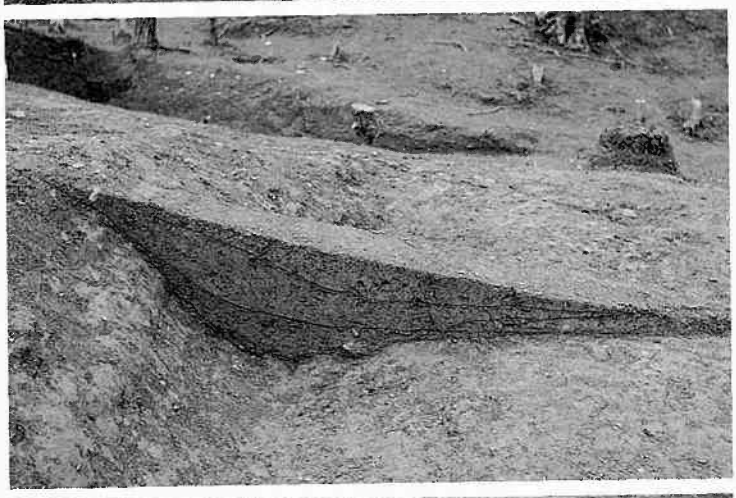
郷原石堂口遺跡
郷原13号墳
墳丘東斜面須恵器
出土状況（北から）

郷原石堂口遺跡
郷原13号墳
南溝土層断面
（北東から）

郷原石堂口遺跡
郷原13号墳
南溝高杯出土状況
（東から）

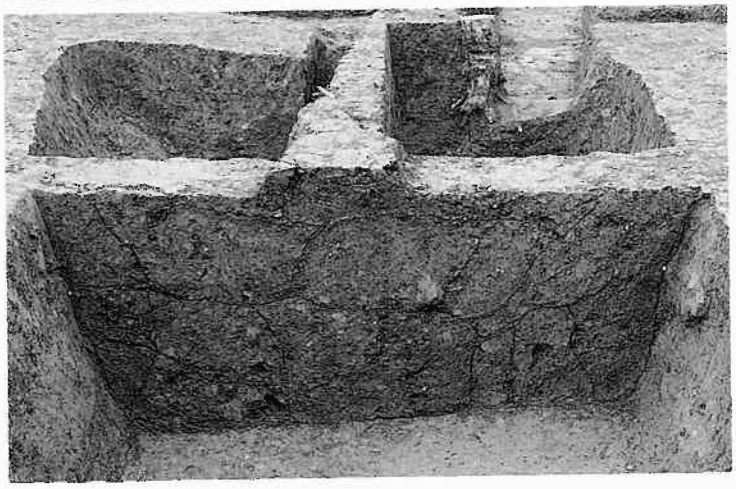
図版 4

郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
土層ベルト設定状況
（北東から）



郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
南溝土層断面
（北東から）

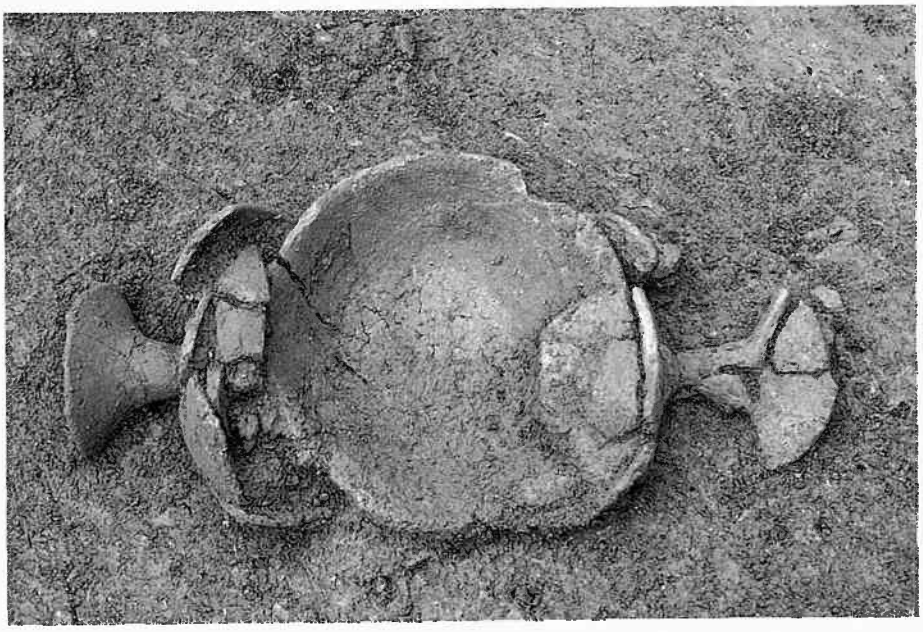
郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
第１主体部東西土層断面
（北西から）



郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
第１主体部南北土層断面
（北東から）

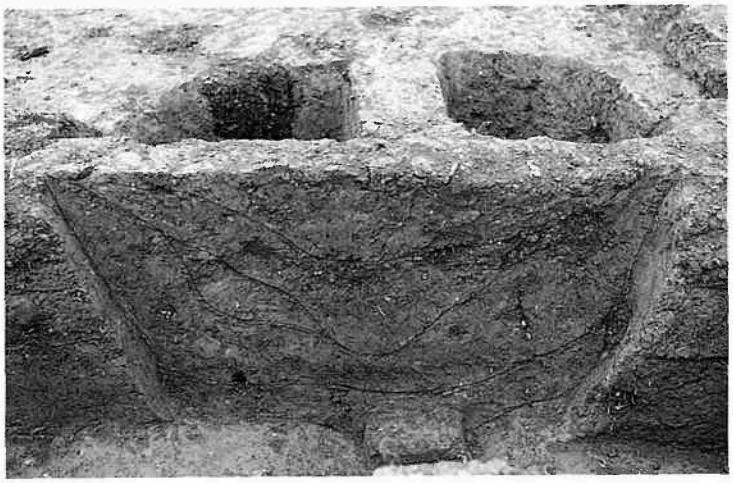
郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
第１主体部
検出状況
（北東から）

郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
第１主体部
遺物出土状況
（北西から）

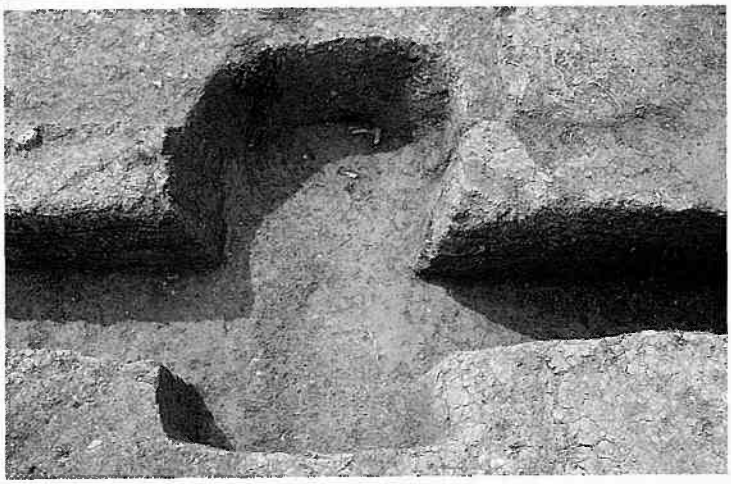


郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
第１主体部
高杯転用枕
（北東から）

図版 6



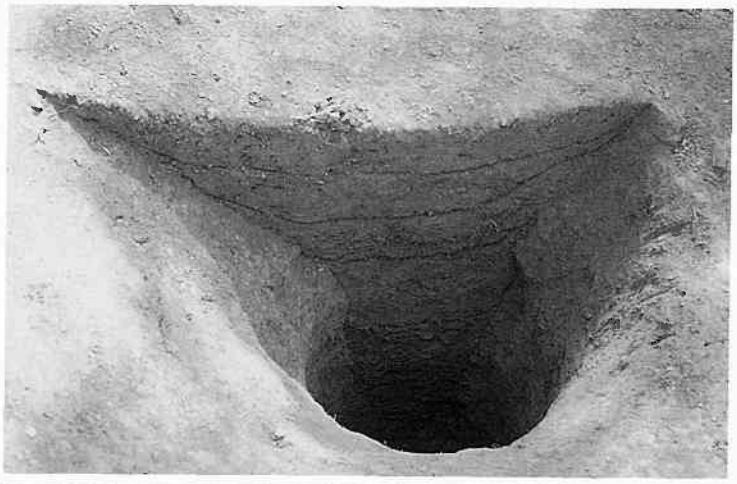
郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
第２主体部南北土層断面
（東から）



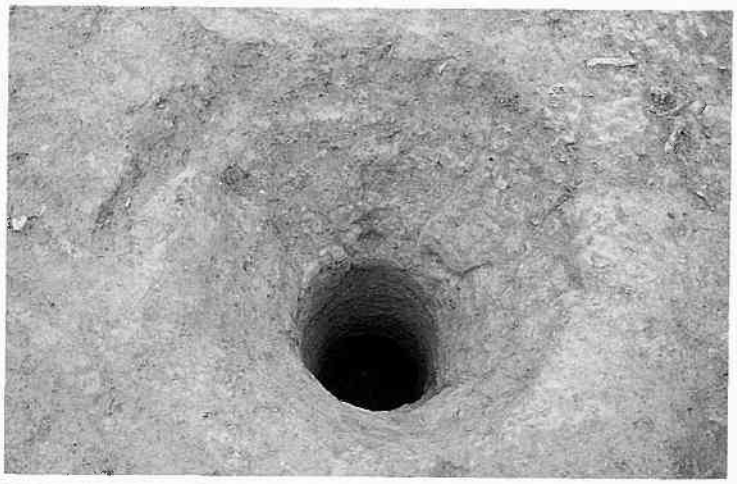
郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
第２主体部検出状況
（東から）

郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
第２主体部刀子出土状況
（東から）

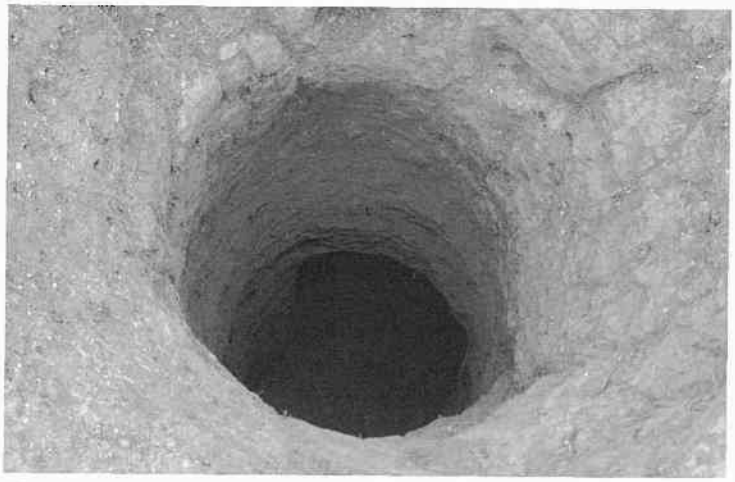
郷原石堂口遺跡
郷原14号墳
墳丘断割状況
（北東から）



郷原石堂口遺跡
SK-01土層断面
（北から）



郷原石堂口遺跡
SK-01検出状況
（西から）



郷原石堂口遺跡
SK-01横口部
（西から）

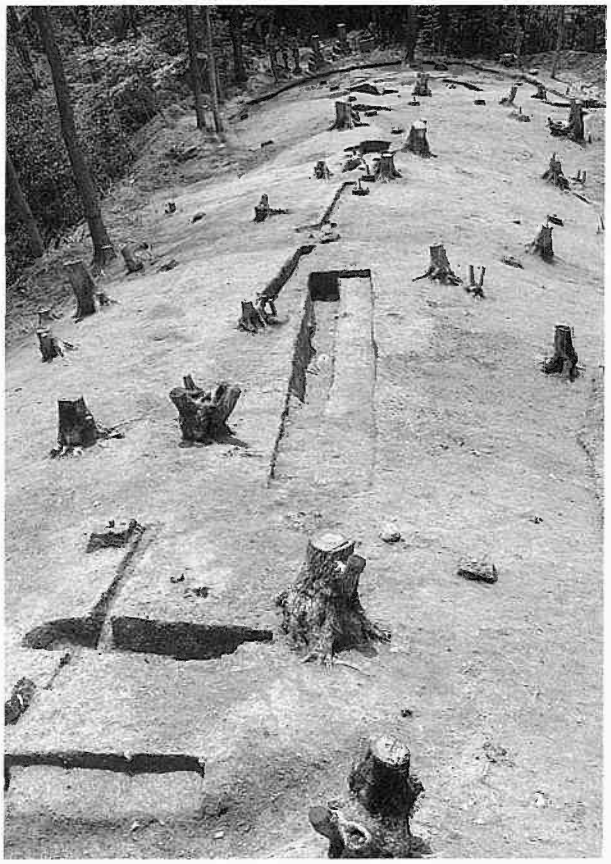
郷原石堂口遺跡
SK-02検出状況
（北から）

図版 8

郷原古墳群
調査前
（北西から）

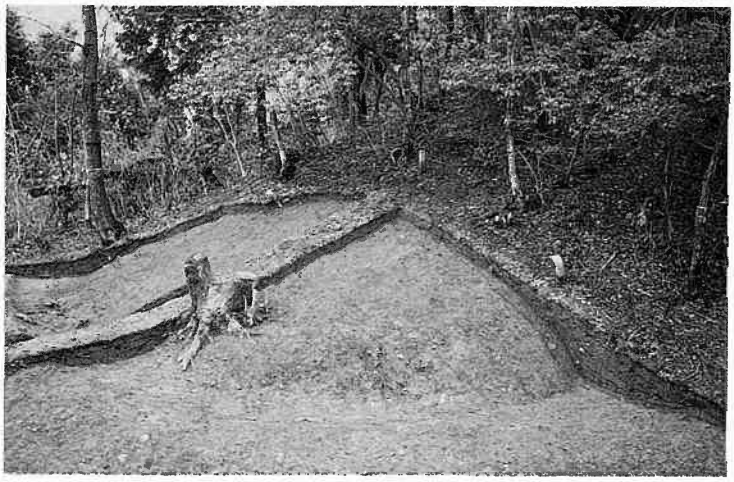
郷原古墳群
調査前
（南から）

郷原古墳群　調査区土層ベルト設定状況（北西から）



郷原古墳群　調査区全景（北西から）

郷原古墳群
郷原 3 ・10号墳
調査前
（南から）



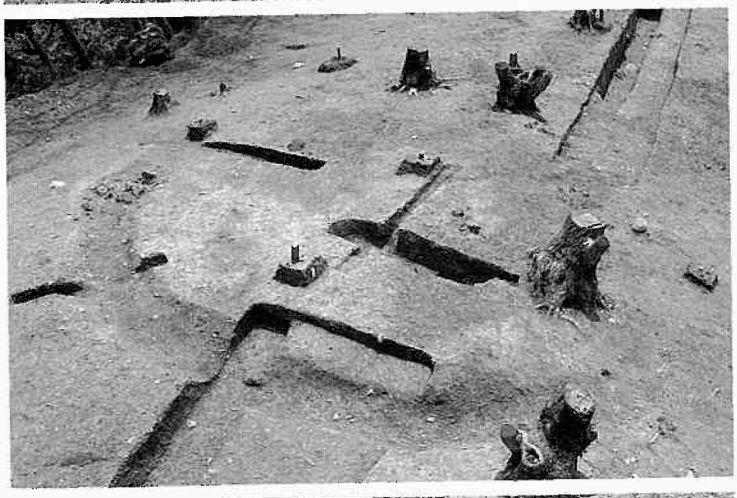
郷原古墳群
郷原 3 号墳
土層ベルト断面
（南東から）

郷原古墳群
郷原 3 号墳
墳丘断割状況
（南東から）

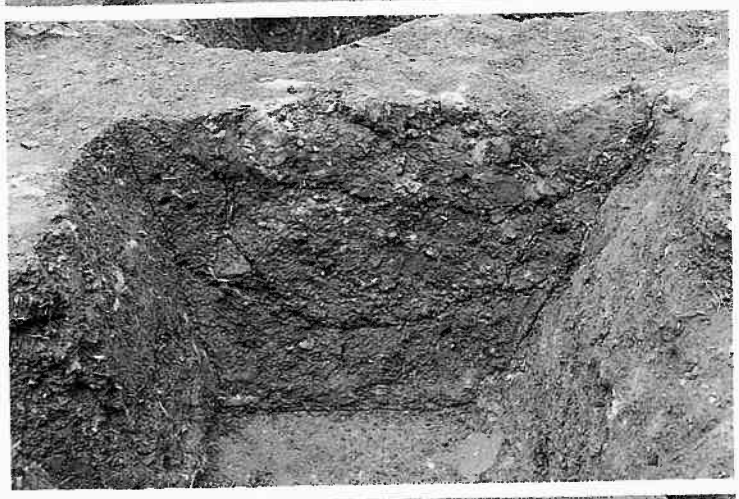
郷原古墳群
郷原 3 号墳
周溝内須恵器出土状況
（東から）

図版10

郷原古墳群
郷原10号墳
土層ベルト断面
（北東から）



郷原古墳群
郷原10号墳
検出状況
（北西から）



郷原古墳群
郷原10号墳
主体部土層断面
（東から）

郷原古墳群
郷原10号墳
主体部検出状況
（東から）

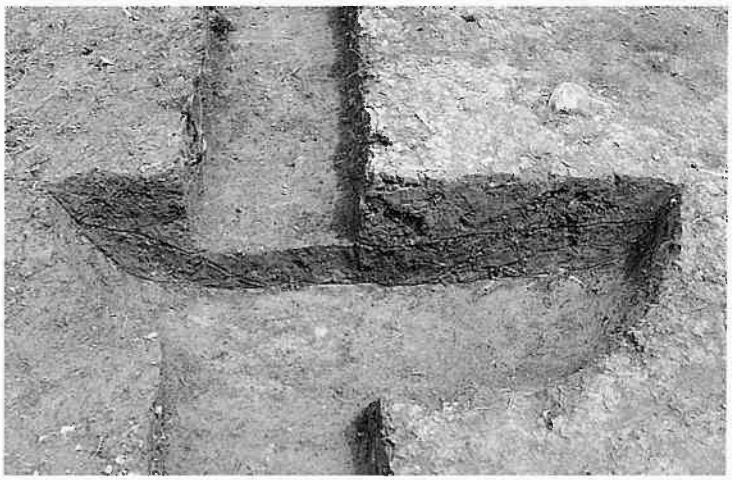
郷原古墳群
郷原10号墳
墳丘断割断面
（北東から）

郷原古墳群
郷原15号墳
土層ベルト断面
（南西から）

郷原古墳群
郷原15号墳
墳丘遺存状況
（北西から）

郷原古墳群
郷原15号墳
墳頂部精査後
（西から）

図版12

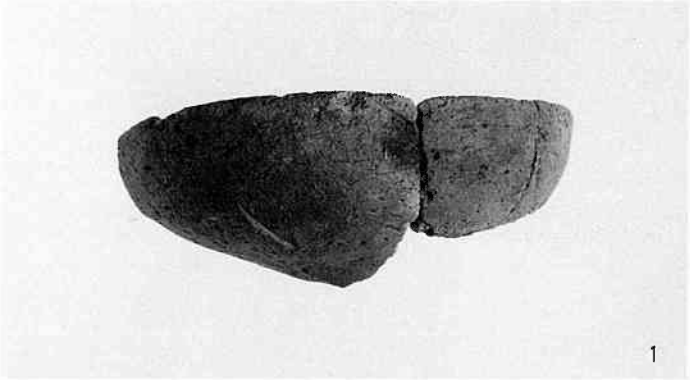


郷原古墳群
SK-01
土層断面
（南から）

郷原古墳群
SK-01
検出状況
（西から）

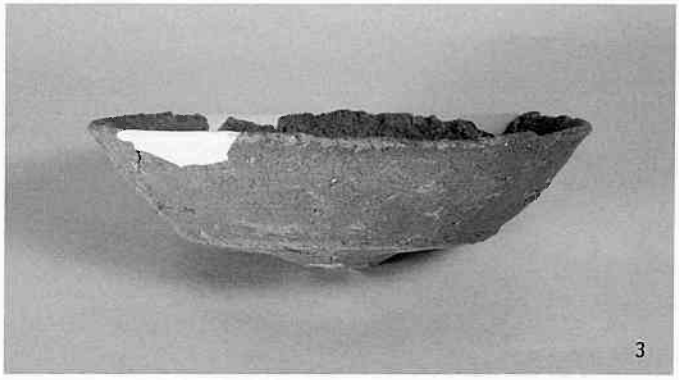
郷原古墳群
SK-02
土層断面
（西から）

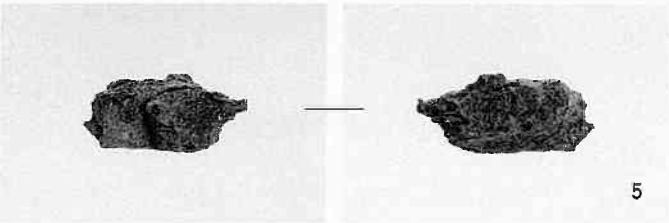
郷原古墳群
SK-02
検出状況
（西から）



郷原石堂口遺跡 郷原13号墳南溝出土高杯

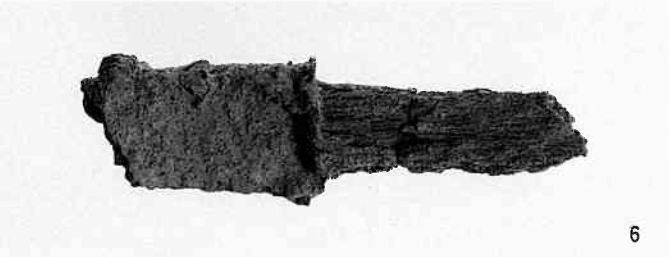
郷原13号墳北東斜面出土須恵器



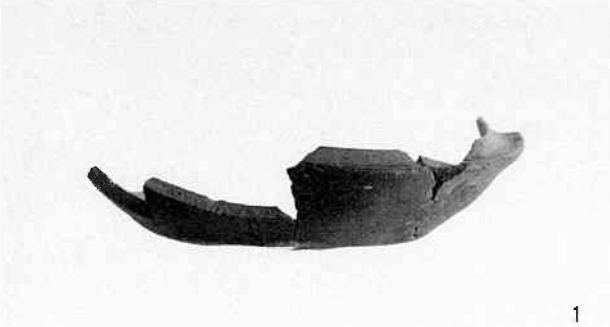


郷原14号墳第１主体部出土遺物

郷原14号墳第１主体部出土遺物



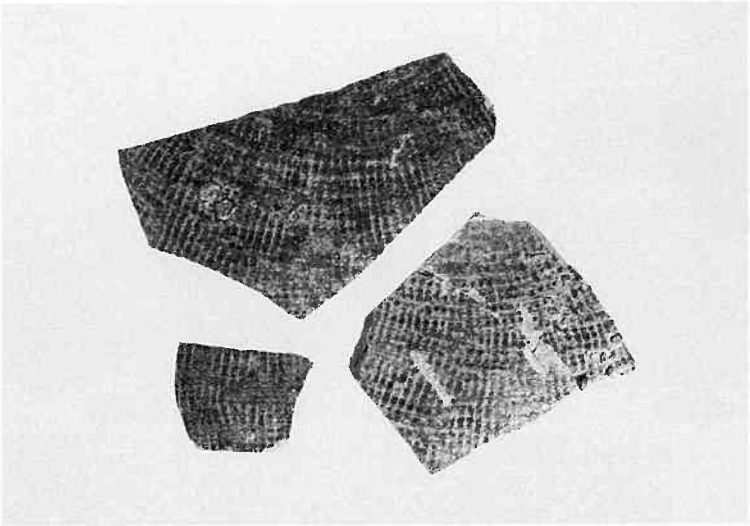
郷原14号墳第２主体部出土遺物



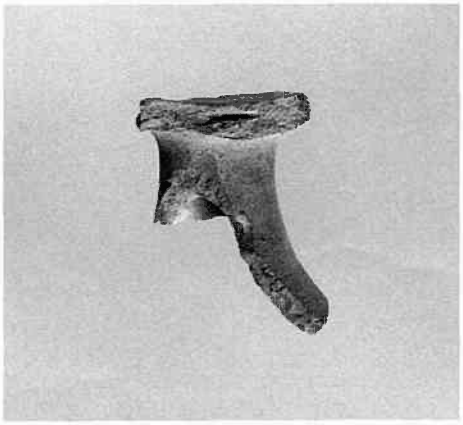
郷原古墳群 郷原３号墳周溝出土遺物

郷原３号墳周溝出土遺物

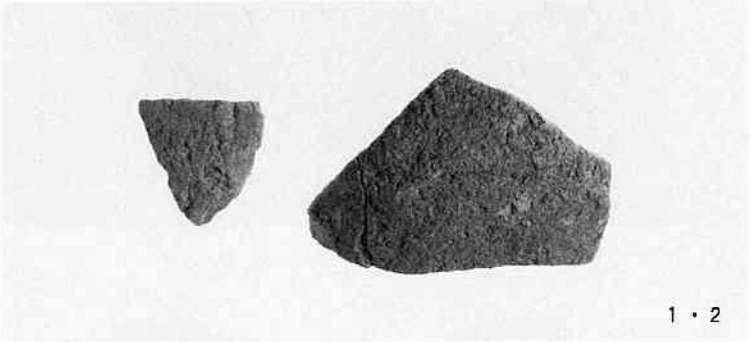
図版14



郷原３号墳南東出土須恵器



郷原古墳群Ｃ２杭東斜面出土須恵器



郷原10号墳南東出土土師器

郷原古墳群Ｄ４杭東斜面出土土師器

報告書抄録

ふりがな	ごうばらいしどうぐちいせき・ごうばらこふんぐん
書名	郷原石堂口遺跡・郷原古墳群
副書名	一般県道河原インター線道路改良工事に伴う郷原石堂口遺跡、郷原3・10・13・14・15号墳の発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	谷口　恭子
編集機関	財団法人　鳥取市文化財団
所在地	〒680-0015　鳥取県鳥取市上町88　TEL　(0857)23-2140
発行年月日	西暦2006年(平成18年)7月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
ごうばらいしどうぐちいせき 郷原石堂口遺跡	とっとりし 鳥取市 かわはらちょう 河原町 ごうばら 郷原	31201	1-0235	35° 23′ 36″	138° 22′ 58″	H17 12 02 ～ H18 04 07	770	道路建設
ごうばらこふんぐん 郷原古墳群	とっとりし 鳥取市 かわはらちょう 河原町 みたに 三谷		1-0182 1-0231	35° 23′ 43″	138° 22′ 08″	H18 03 08 ～ H18 04 26	660	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郷原石堂口遺跡 郷原13号墳 14号墳	古墳	古墳時代中期	方墳　2基	土師器　高杯・壺 鉄剣 刀子 須恵器甕片	高杯転用枕 小口溝をもつ墓壙
			土坑　2基		深さ3.5m 横口をもつ土坑
郷原古墳群 郷原3号墳 10号墳 15号墳	古墳	古墳時代中期 後期	円墳　3基	土師器片 須恵器片	
			土坑　2基		

郷原石堂口遺跡・郷原古墳群

——一般県道河原インター線道路改良工事に伴う

郷原石堂口遺跡・郷原３・10・13・14・15号墳の発掘調査—

平成18年７月25日　印刷・発行